

## 17. 重視する暮らし方

### Summary

最も多い回答は「人間関係」であり、一番重視すると回答したカテゴリ（29.4%）でも、傾斜後の全体集計（26.2%）でも同様であった。次いで、「経済的豊かさ」、「心身の健康」の順番である。なお、傾斜後の全体集計では「経済的豊かさ」の割合が低下し、「心身の健康」や「技能や能力」などを重視している結果も得られた。

Q14. 以下の1～9であげる暮らし方のうち、あなたが重視する順に3つを回答欄に書いてください。

- |                           |                  |
|---------------------------|------------------|
| 1 経済的により豊かなくらしをめざす        | 2 地位と名誉を手に入れたい   |
| 3 有名になりたい                 | 4 社会の役に立つような事をする |
| 5 自分の技能や能力を伸ばしていく         |                  |
| 6 家族や友人といった人間関係を大切にしていく   |                  |
| 7 心と体の健康を大切にす             |                  |
| 8 あくせくせずに、のんきにクヨクヨしないでくらす |                  |
| 9 その他                     |                  |

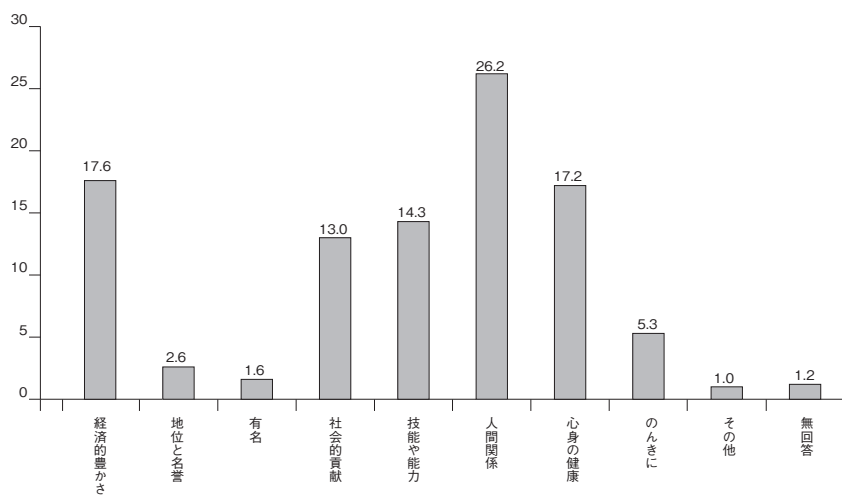
第1位に挙げられた割合で最も高かったのが「家族や友人といった人間関係を大切にしていく」（以下「人間関係」）の29.4%（前回36.0%）である。ただ、直近の調査では、第14回調査を境に42.1%、38.5%、36.0%と減少しており、今回で3割を切っている。2番目に選択率が高かったのは、「経済的により豊かなくらしをめざす」（以下「経済的豊かさ」）の20.3%（18.9%）と前回よりも増加している。3番目は「心と体の健康を大切にす」（以下「心身の健康」）で15.6%（11.6%）と順位は前回の5番目から繰り上がった。

学部別では、前はすべての学部で「人間関係」の選択率が最も高かったが、今回は法学部、理工学部で「経済的豊かさ」が最も高く、学年別では、すべての学年で「人間関係」の選択率が最も高い。2番目に選択率が高い「経済的豊かさ」は1年生（25.3%）から4年生（11.5%）への学年進行と共に減少し、逆に4年生では、「人間関係」の選択率が1年生（26.6%）から4年生（32.9%）と学年進行と共に増加している。また、「心身の健康」は4年生のみが21.4%と大きく伸ばす結果となった。なお、前回の調査でみられた「社会の役に立つような事をする」の学年進行に伴う割合の増加は、みられなかった。これらの数値の変化は、入学後の学生の変化として注目に値する。

男女別では、最も重視するとした回答は、女性は「人間関係」（34.1%）で、男性は「経済的豊かさ」（26.7%）となり、回答が大きく分かれる結果となった。

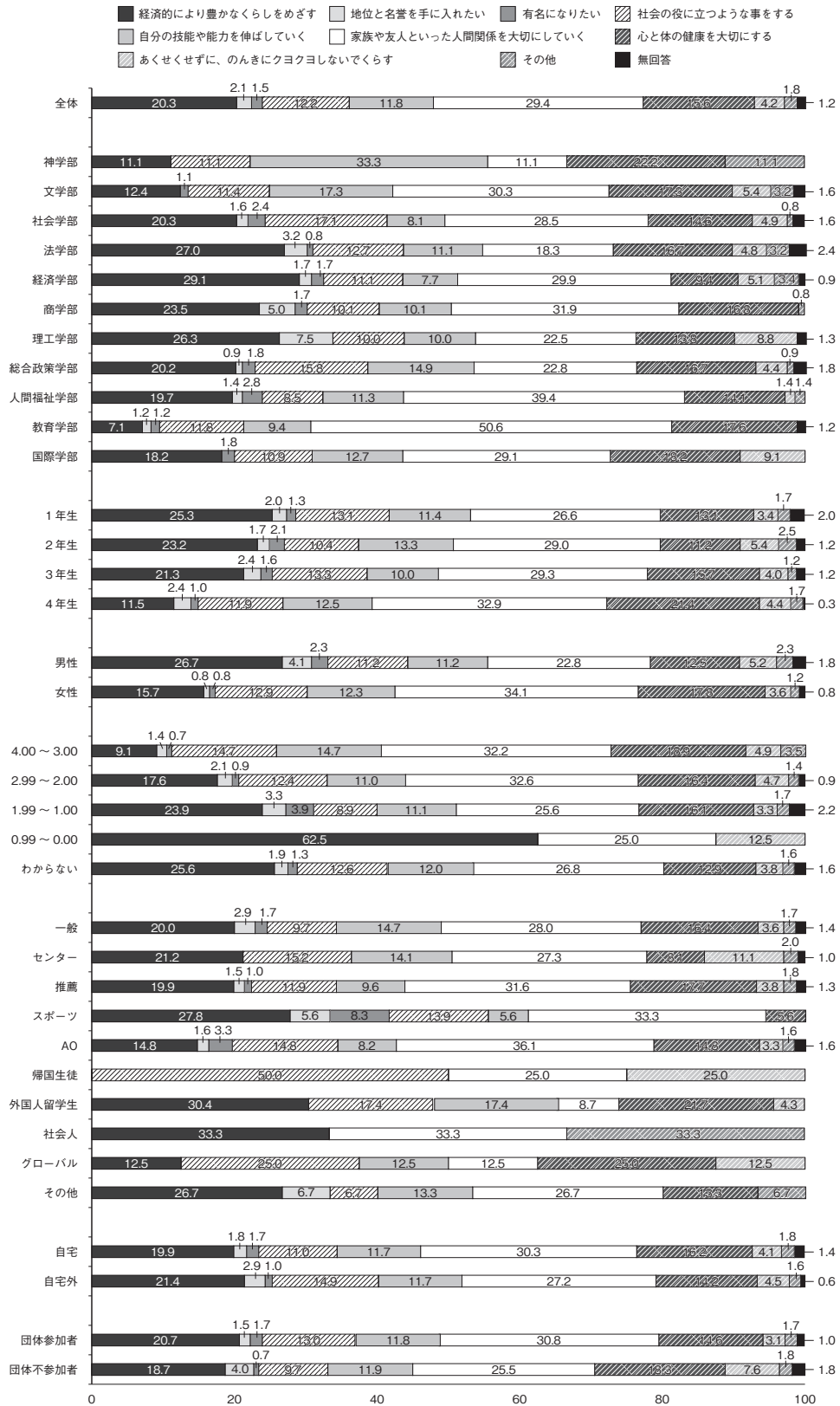
次に、今回の設問は重視する順に3つ回答欄に記載することから、最も重視する順にそれぞれ3倍、2倍、1倍と傾斜をかけ分析を行った（図Ⅱ-17-1）。その結果、上位3項目の順位は、「人間関係」（26.2%）、「経済的豊かさ」（17.6%）、「心身の健康」（17.2%）と変動はなかったが、「経済的豊かさ」と「心身の健康」の差が第1位に挙げられた場合は4.7ポイントの乖離があるが、上位3項目の傾斜をかけた場合だと、0.4ポイントに縮まる結果となり、改めて学生の「心身の健康」の重要性が注目される結果となった。また、「社会的貢献」（13.0%）と「技能や能力」（14.3%）の順位が入れ替わるなど、第1順位での集計結果とは異なる結果が得られた。

図Ⅱ-17-1 重視する暮らし方（傾斜後）

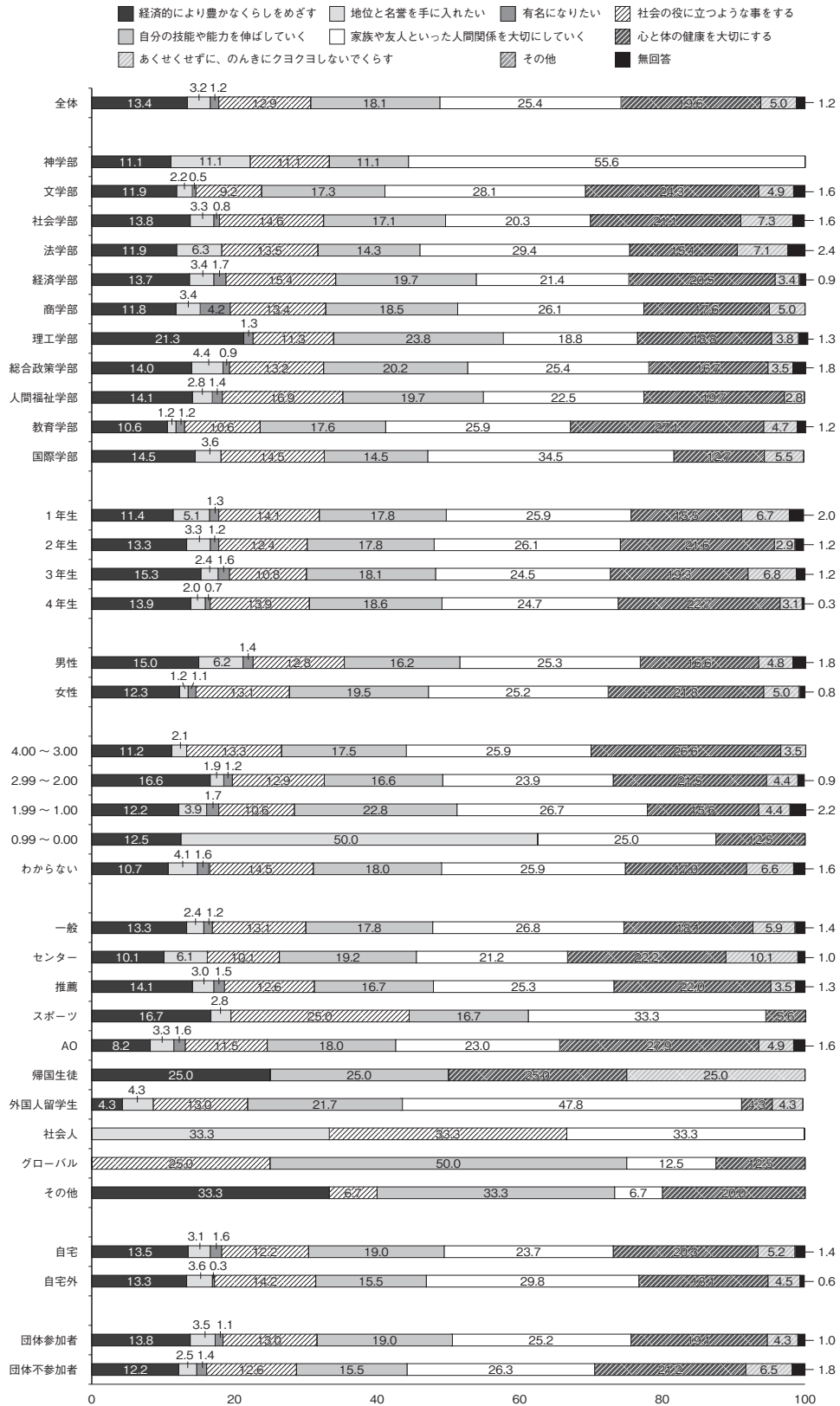


※最も重視する順にそれぞれ3倍、2倍、1倍と傾斜

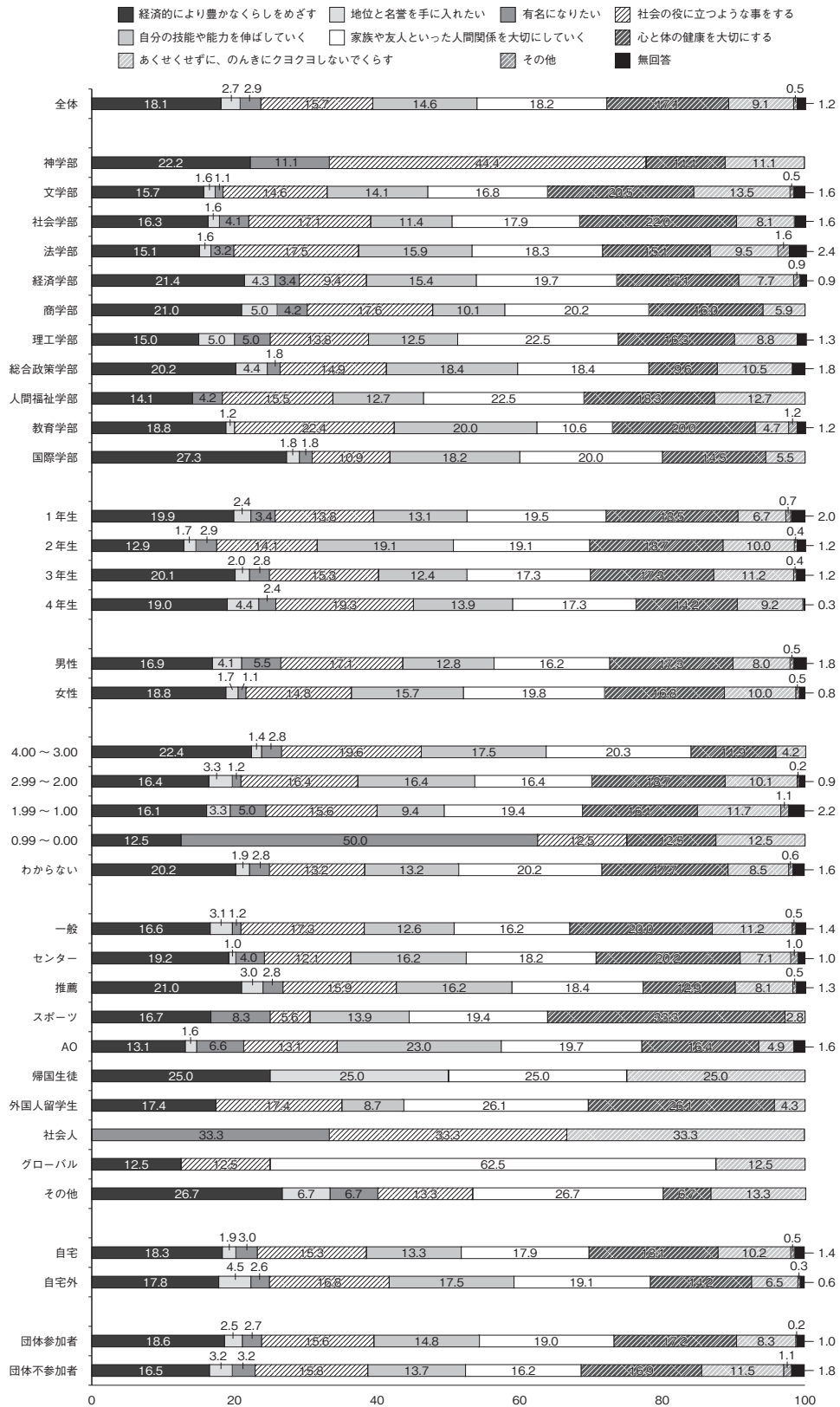
図Ⅱ-17-2 重視する暮らし方（第1位）



図Ⅱ-17-3 重視する暮らし方（第2位）



図Ⅱ-17-4 重視する暮らし方（第3位）



## 18. 学習の方法（情報・資料収集）

### Summary

全体の傾向として、実際に図書館へ行って情報収集するタイプ（27.7%）と、ネット上に公開されている論文・図書を検索するタイプ（26.2%）が多い。ただし、無料サイトのような情報の信頼性が問われるWebサイトの利用者も多い（21.4%）ことは留意すべきであり、基礎演習などの初年次教育で今まで以上にリテラシーを学習させていく必要がある。

- Q15. あなたは授業でレポートの課題ができた場合、どのような手段を参考にして、情報や資料を集めますか。作成するにあたり、もっとも参考をしたものに、1つだけ○をつけてください。
- 1 インターネットの無料サイト（ウィキペディアや質問サイトなど）を参考にする
  - 2 インターネット上にある関連論文・図書を参考にする
  - 3 図書館が提供するWebデータベースで関連図書・論文・新聞記事を参考にする
  - 4 図書館に行って、関連論文・図書を参考にする
  - 5 先生に話を聞きに行って、参考にする
  - 6 友人や先輩に話を聞きに行って、参考にする

ここではレポート課題にあたって情報収集の手段について尋ねている。全体の傾向として実際に図書館へ行って情報収集するタイプ（27.7%）と、ネット上に公開されている論文・図書を検索するタイプ（26.2%）が多いことが特徴といえる。さらに図書館から提供される各種Webデータベースの利用者も一定数いる（18.8%）ことがわかる。ただしネット上で情報収集する場合もウィキペディアのような情報の信頼性が問われるWebサイトの利用者も多い（21.4%）ことにも留意すべきである。

それでは所属学部によってどの利用手段がよく用いられるのか、それぞれの特徴を述べていく。まず概略的に特徴を述べると図書館に行って情報収集するタイプが多い学部（神・文・社会・教育）と、ネット上に公開されている論文・図書を検索するタイプが多い学部（法・経済・商・総合政策）に大別することができる。これらに加え図書館から提供されるデータベースの利用者が多い学部（神・国際）もある。

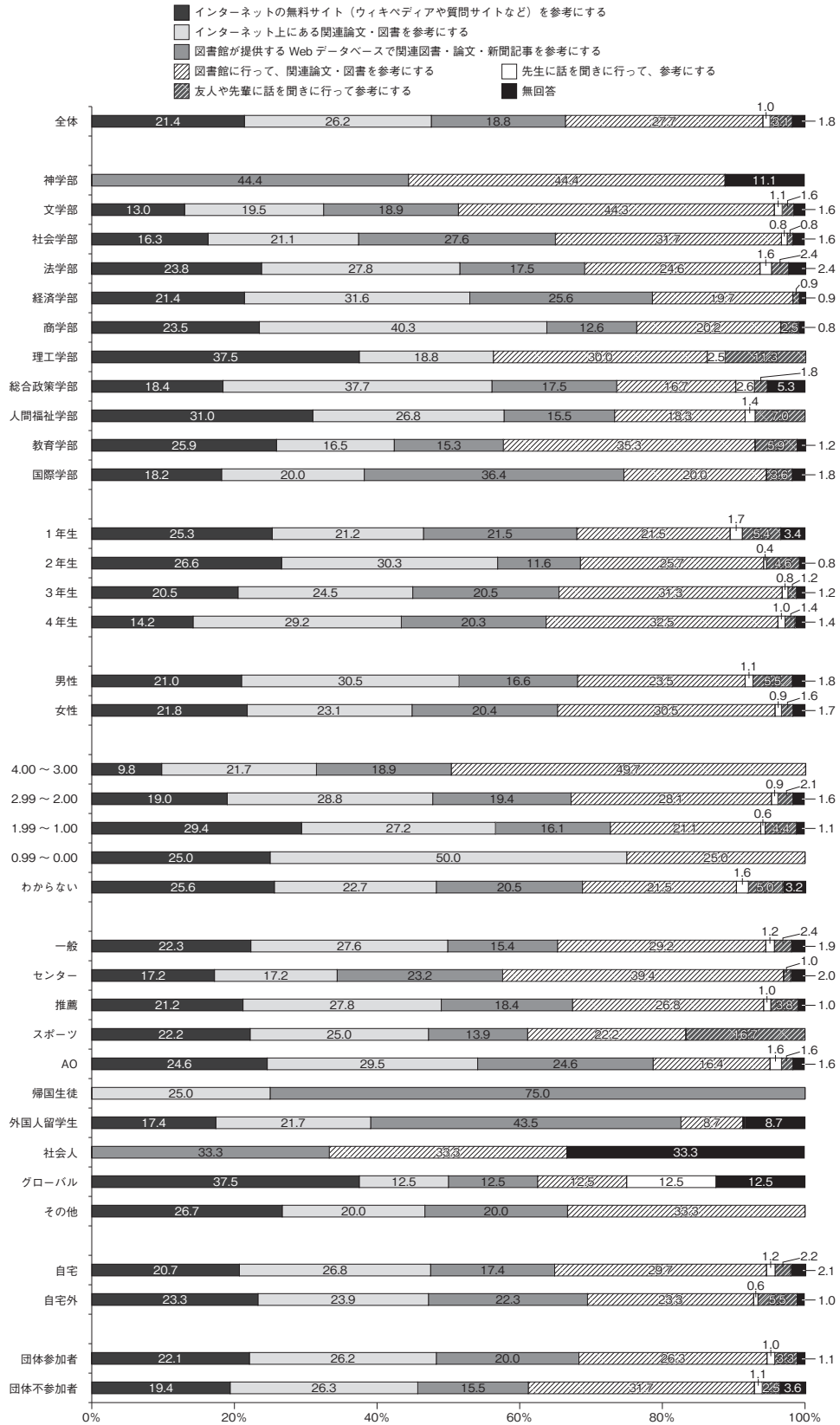
全体の傾向でも留意すべき点として挙げたウィキペディア等のWebサイト利用者だが、理工学部および人間福祉学部での利用者が多いことは加えて留意すべきである。ただし理工学部では図書館に行って情報収集するタイプも一定数おり、人間福祉学部ではネット上に公開されている論文・図書を利用するタイプも一定数いることも留意しておくといよい。所属学部の傾向について若干考察するなら学問領域によってネット上で利用できる情報資源（論文・図書など）の多寡があり、それが利用者の動向を傾向づけていると思われる。

学年による回答分布の特徴について述べる。1年生ではウィキペディア等のWebサイト利用が多く（25.3%）それは2年生でも同様である（26.6%）。ただし2年生はネット上に公開されている論文・図書も利用する学生が最も多い（30.3%）ことが挙げられる。この傾向は上級生では逆転する。上級生では図書館に行って情報収集する傾向が強い。たとえば3年生では31.3%の学生が、4年生では32.5%の学生が図書館に直接出向いて利用している。これは上級生がゼミ論文や卒業論文なども含めたレポート課題においてより正しい資料の利用を求められるからだと推測できる。

入試区分による回答分布（図Ⅱ-18）からかなりはっきりとした特徴が出ている。ネット上で公開されている論文や図書を利用する傾向が高いのは推薦入試（27.8%）スポーツ推薦入試（25.0%）AO入試（29.5%）を経た学生であり、図書館に行って情報収集する傾向が高いのは一般入試（29.2%）

センター利用入試（39.4％）社会人入試（33.3％）を経た学生である。さらに特徴的なのは図書館から提供されるデータベースを利用する傾向が帰国生徒入試（75.0％）および外国人留学生入試（43.5％）において非常に高い傾向を示していることである。これは大学入学までの（海外での）学習活動においてこれらの手段をもっぱら利用していたからではないかと推測される。

図Ⅱ-18 学習の方法（情報・資料収集）





## 19. 図書館を利用する目的

### Summary

全体として、「図書館が所蔵している図書・資料を利用するため」と「閲覧席で自習するため」の2項目を合わせて70%を超えている。特にGPAとの相関をみると、GPAが高い層ほど、これらの目的で図書館を利用するという関係にある。また、学年進行により「図書館が所蔵している図書・資料を利用するため」の割合が増加している。

Q16. あなたが図書館を利用するときの目的は何ですか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |                          |                  |
|--------------------------|------------------|
| 1 図書館が所蔵している図書・資料を利用するため | 2 閲覧席で自習するため     |
| 3 ゼミなどでグループ学習をするため       | 4 館内のパソコンを利用するため |
| 5 DVD等を視聴するため            | 6 その他            |

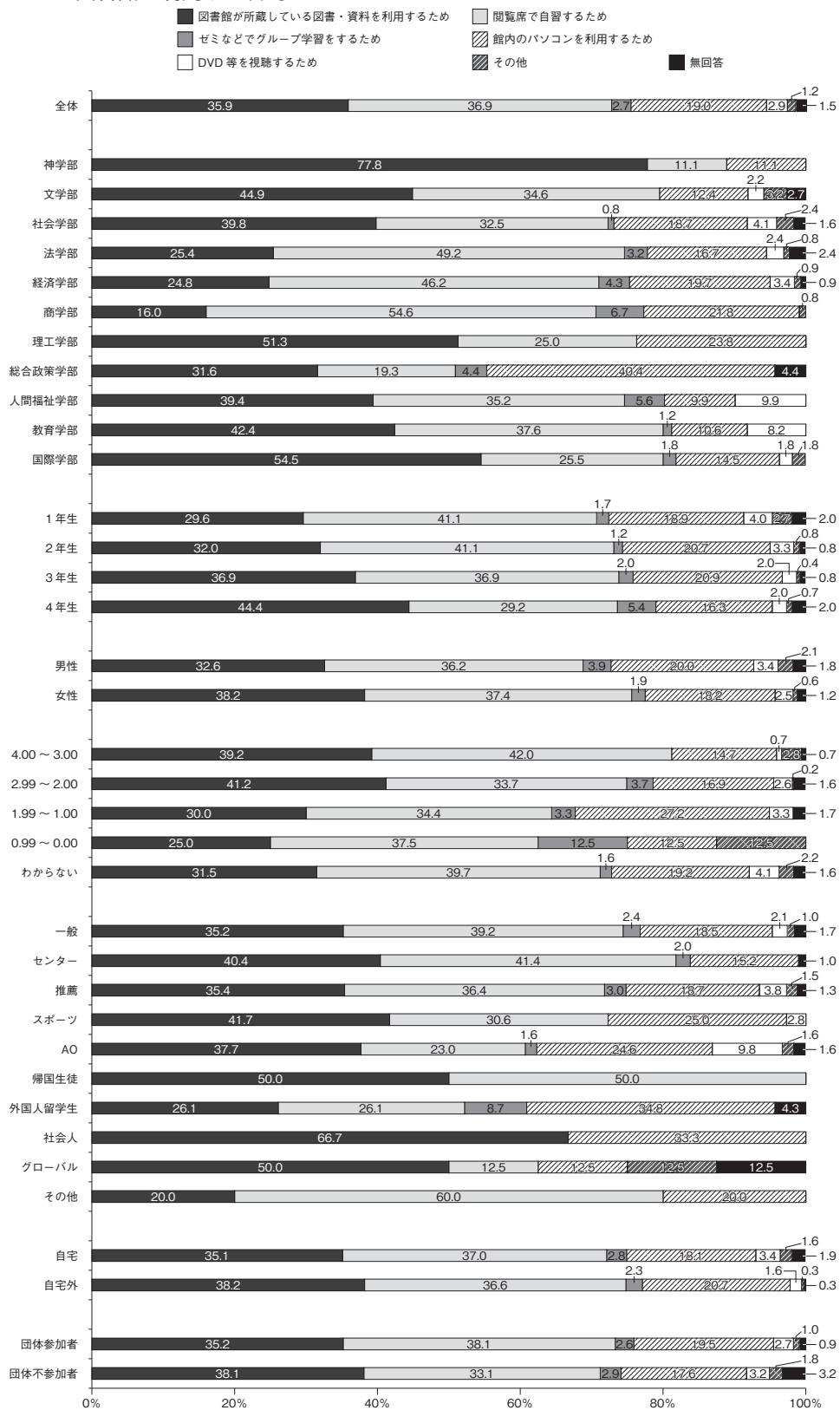
毎日多くの学生が利用する大学図書館では、入館統計や貸出統計から学部別や学年別、貸出図書の分野別などの利用傾向を把握することはできるが、学生が何をするために来館しているのかは業務システムではカウントできない。そのため、図書館の利用目的をこの調査で把握できたことは意義がある。もちろん一度に複数の目的を持って来館することや、日によってその目的は変わることもあるが、調査対象者である学部生には「最もあてはまるもの」として回答してもらった。

全体として、「図書館が所蔵している図書・資料を利用するため」と「閲覧席で自習するため」の2項目を合わせて70%を超えた。特にGPAとの相関をみると、成績が良いほどこれらの目的で図書館を利用するという関係にあることがわかり、GPA上位の層では80%を超えている。

学部別の詳細では、「図書館が所蔵している図書・資料を利用するため」と回答した割合が全体の50%を超えたのは、サンプル数が少ない神学部を除くと、国際学部（54.5%）と理工学部（51.3%）である。一方で、この回答の割合が極端に小さいのは商学部（16.0%）で、経済学部（24.8%）、法学部（25.4%）と続く。これら3学部では逆に「閲覧席で自習するため」が50%前後を占めている。なお、「館内のパソコンを利用するため」と回答した割合が総合政策学部で40.4%と突出しているのは、神戸三田キャンパス図書メディア館内のメディアフォーラムにキャンパスで最も多くのパソコンが設置されているためと考えられる。

学年別でみると、1年生は「閲覧席で自習するため」が41.1%で最も多く、「図書館で所蔵している図書・資料を利用するため」は29.6%で、その差は11.5ポイントある。2年生でその差が小さくなって、3年生で同率になり、4年生では「自習するため」が29.2%で、「図書・資料を利用するため」が44.4%と逆転している。

図Ⅱ-19 図書館を利用する目的



## 20. 図書館サービスの利用経験

### Summary

日常的に利用する図書館サービスではない「利用相談」や「相互利用制度」については、利用率はそれほど高くはないが、認知度が一定程度あることがわかった。「図書館ホームページ」や「OPAC」「Webデータベース」は、それらに比べよく利用されているので、今後も利用を拡大したい。

Q17. 図書館が提供している以下のサービスの利用経験についてお尋ねします。

A～Eについて、それぞれ1（存在を知らなかった）から4（よく利用する）までの数字を1つだけ選んで○をつけてください。

- A. レファレンスカウンターでの利用相談
- B. 相互利用制度
- C. 大学図書館ホームページ
- D. OPAC（関西学院大学図書館蔵書検索システム）
- E. Webデータベース（CiNii、日経テレコン21など）

図書館が提供している各種サービスが、学部生にどの程度認知され、利用されているかを回答から読み取るにあたって、これまでの調査と同様に次の基準を設けて分析した。

- ・認知度の測定においては、「よく利用する」、「ときどき利用する」、「知っているが、利用したことはない」と回答したものをまとめて、「サービスの存在を認知している」とする。
- ・利用経験に関しては、「よく利用する」と「ときどき利用する」と回答したものを「利用経験あり」とし、「知っているが、利用したことはない」と「存在を知らなかった」と回答したものを「利用経験なし」とする。

質問項目は前回調査より数を絞り込んでA～Eの5項目にしたが、すべて前回調査結果との比較ができるため、前回調査後に図書館サービスの認知度・利用経験の向上に取り組んだ施策の成果を確認することができた。

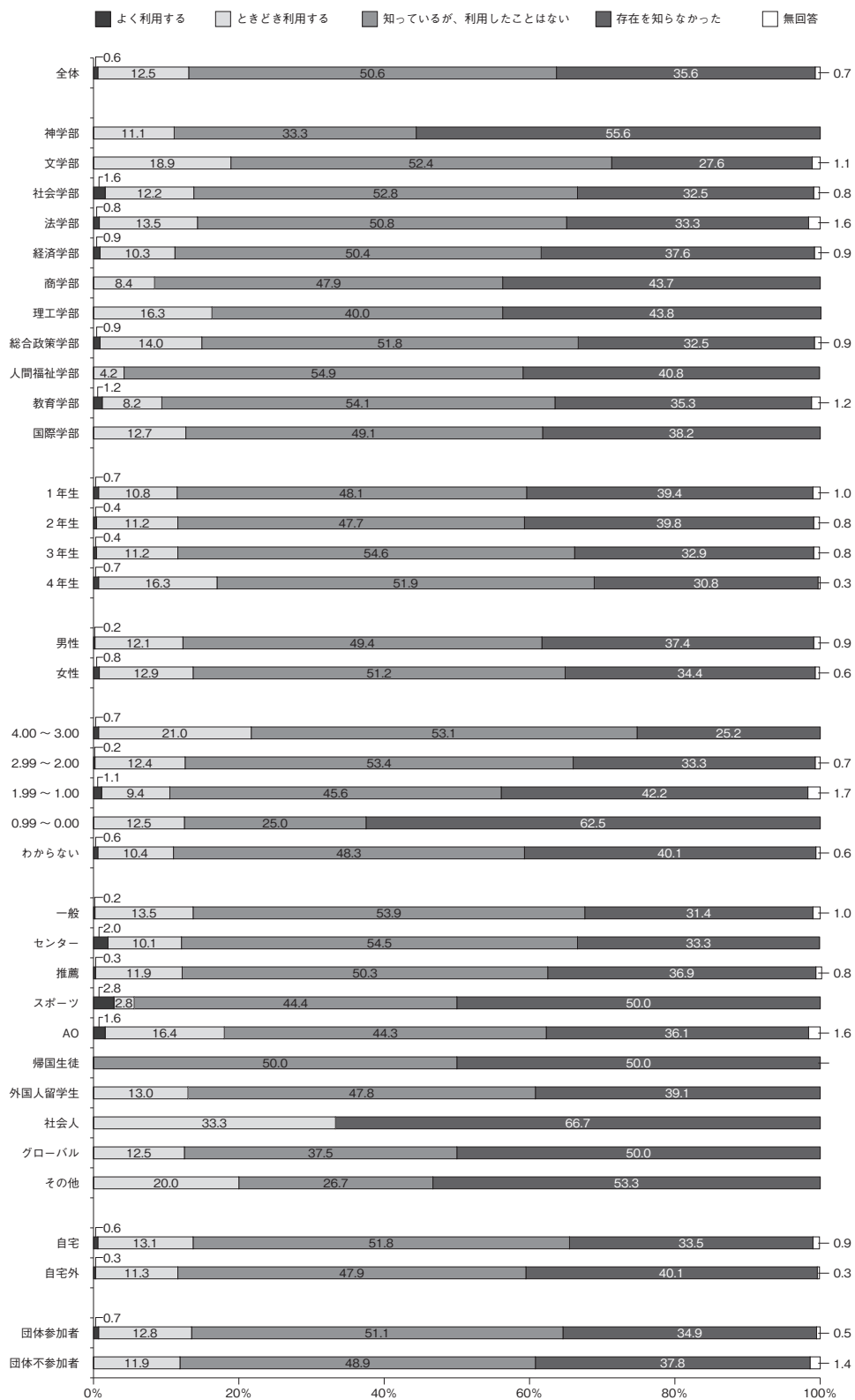
### A. レファレンスカウンターでの利用相談

図書館の使い方や資料の探し方がわからない、あるいは必要な図書や論文が見つからないという場合の相談窓口であるレファレンスカウンターは、「存在を知っていれば必要になったときに利用できて便利なサービス」である。よって、図書館としては認知度を高めることを重視している。今回の調査では、「存在を知らなかった」と回答した割合は全体で35.6%だった。2年前の前回調査では37.0%だったので、わずかだが改善した。さらに認知度を高めるために、学生にアピールを続けていきたい。なお、学年が上がるほど、GPAの数値が良いほど、認知度も高くなるという相関関係がみられた。

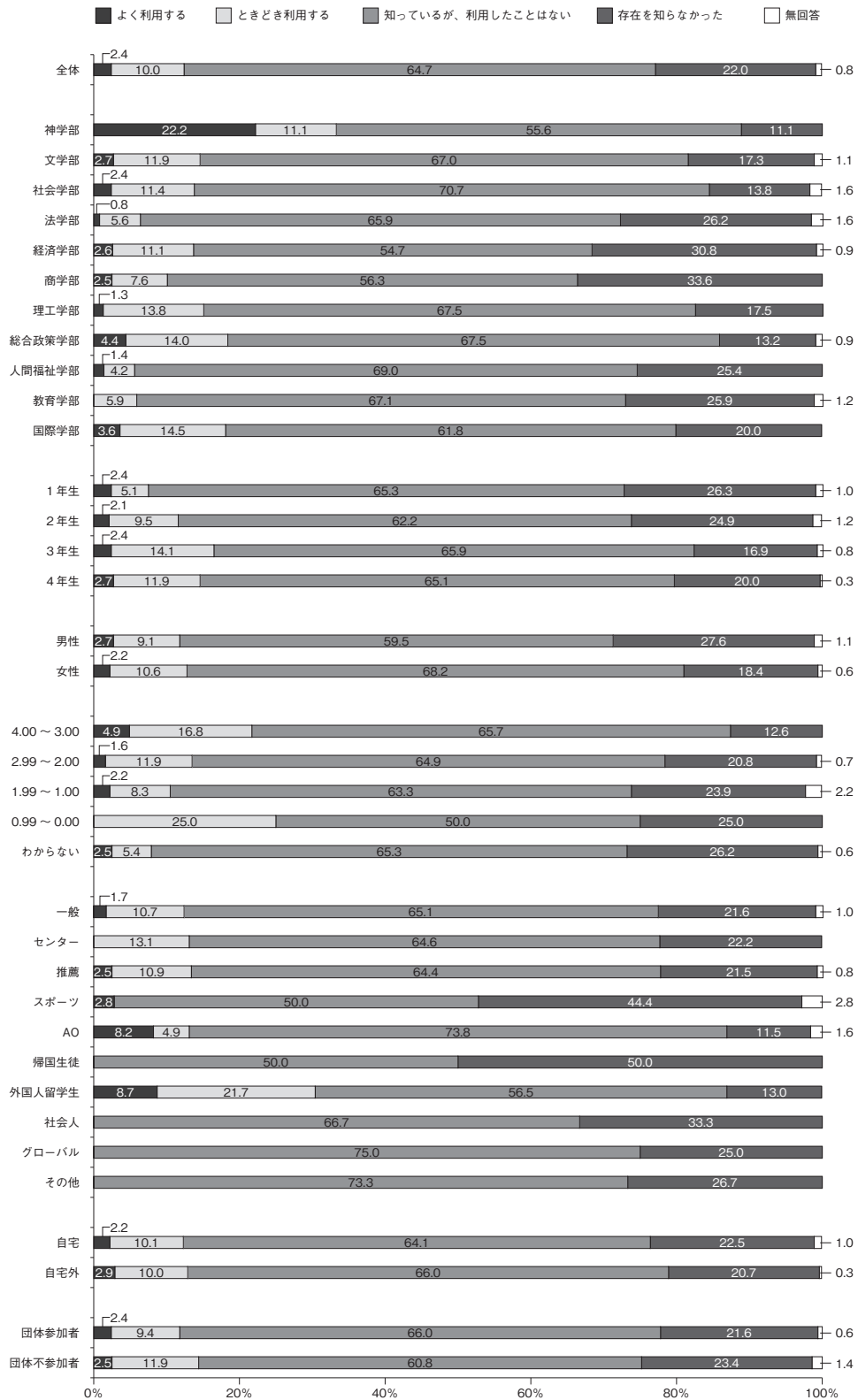
### B. 相互利用制度

学内に所蔵がない図書や論文を他大学から取り寄せる相互利用制度についても、レファレンスカウンターでの利用相談と同様に、日常的に利用する図書館サービスではない。認知度は高めれば高いほどよいが、利用経験は高めればよいというものではない。今回の調査では、「知っているが、利用したことはない」という回答が64.7%を占めた。

図Ⅱ-20-1 図書館サービスの利用経験 A. レファレンスカウンターでの利用相談



図Ⅱ-20-2 図書館サービスの利用経験 B. 相互利用制度



### C. 大学図書館ホームページ

大学図書館ホームページは、図書館の広報媒体であるほかに、すべてのオンラインサービスのゲートウェイとしての機能も有している。したがって、認知度も利用経験も高いことが望まれる。調査結果では、「その存在を知らなかった」という回答は3.6%に過ぎず、十分ホームページの存在が認知されていると言える。また、「よく利用する」と「ときどき利用する」を合わせた利用経験は全体の約70%だった。学部別では、国際学部が85.4%で最も高く、次いで社会学部が81.3%だった。学年別では、1年生が56.2%であるのに対して、4年生は81.7%まで上昇している。GPAとも正の相関関係にある。

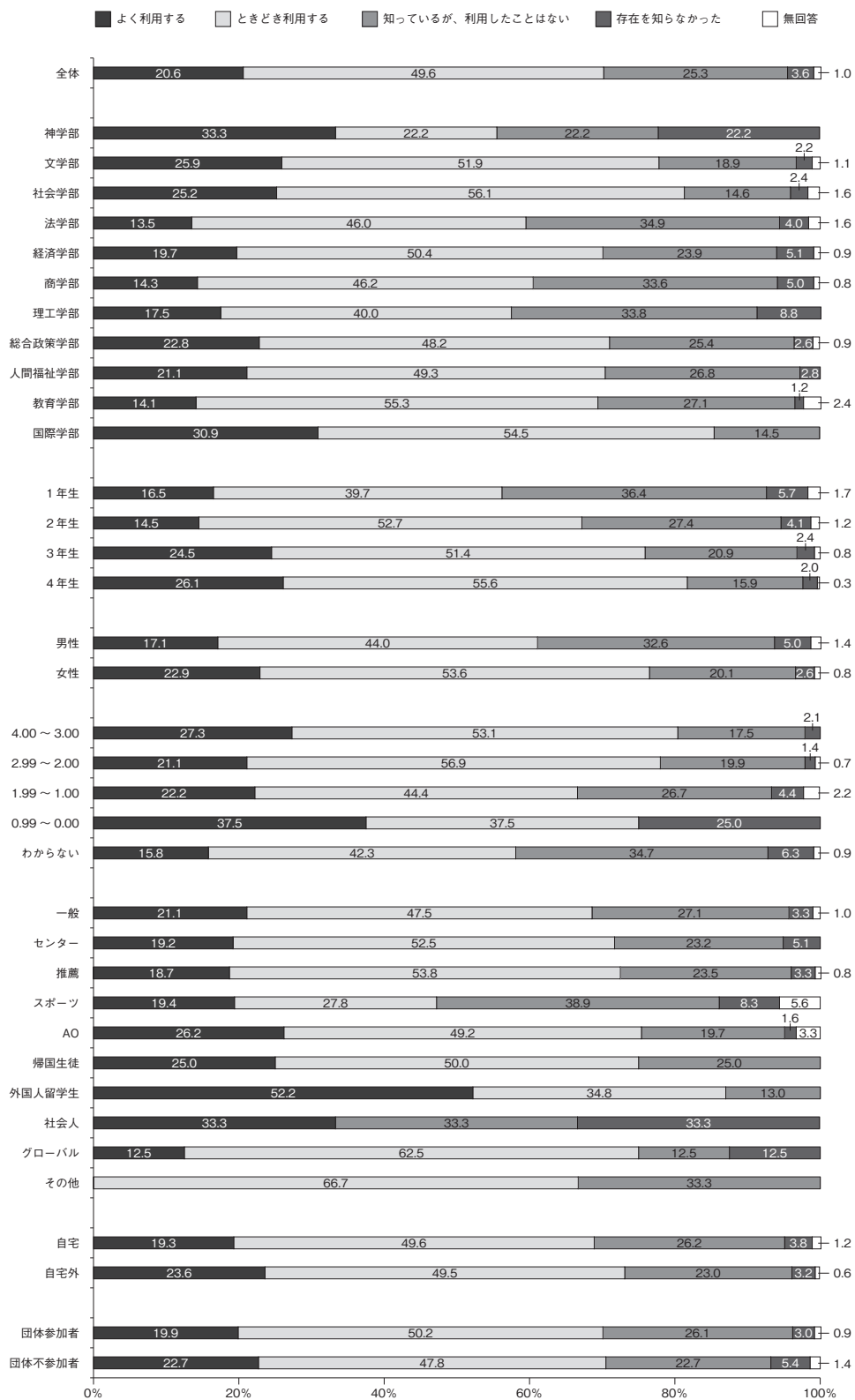
### D. OPAC（関西学院大学図書館蔵書検索システム）

図書館や学部資料室などで所蔵されている図書・資料を検索するだけでなく、予約やキャンパス間の取り寄せなどの手続きがオンラインでできるOPACについて、図書館が実施している基礎演習対象の講習会などを通じて、その存在や使い方を教えることに力を入れている。そのため、「その存在を知らなかった」という回答が全体の2.7%と低いことは望ましい結果である。利用経験に関しても、C大学図書館ホームページとほぼ同様の傾向がみられた。国際学部と社会学部の利用経験は90%近くなり、文学部も84.4%ある。また、4年生の51.9%が「よく利用する」と回答しているのは、Q16の図書館を利用するときの目的として「図書・資料を利用するため」が44.4%と高いことと合わせて、ゼミ研究や卒業論文執筆のためと言えるだろう。

### E. Webデータベース（CiNii、日経テレコン21など）

OPACでは検索できない学術論文や雑誌記事、新聞記事、判例、企業情報などさまざまな学術情報を検索できる各種Webデータベースは、学生にぜひ使ってもらいたい情報源である。調査結果では、学部別で認知度や利用経験に大きな差が出ている。学問分野の違いもあるかもしれないが、国際学部で「その存在を知らなかった」は5.5%で、「よく利用する」が40.0%であるのに対して、理工学部は同じ選択肢の回答が37.5%と2.5%と全く逆の結果になっている。有益な情報源であるこれらのWebデータベースを学生にさらに利用してもらうように、広報に力を入れていきたい。

図Ⅱ-20-3 図書館サービスの利用経験 C. 大学図書館ホームページ



図Ⅱ-20-4 図書館サービスの利用経験 D. OPAC（関西学院大学図書館蔵書検索システム）





図Ⅱ-20-5 図書館サービスの利用経験 E. Webデータベース (CiNii、日経テレコン21など)



## 21. 留学生や外国人教職員との接触度

### Summary

45.3%の学生が日常的もしくはたまに、留学生や外国人教職員と接していると回答している。

所属学部や入試形態ごとに、接触頻度に大きな違いがみられた。

Q18. あなたは留学生や外国人教職員と接する機会がありますか。

最もあてはまるものに、1 つだけ○をつけてください。

- |              |            |
|--------------|------------|
| 1 日常的に接している  | 2 たまに接している |
| 3 ほとんど接していない | 4 全く接していない |

「日常的に接している」が12.3%、「たまに接している」が33.0%、「ほとんど接していない」が23.4%、「まったく接していない」が30.6%と答えている。「日常的に接している」を学部別にみると、留学を必須の条件としている国際学部が41.8%でトップ、続いて神学部33.3%、総合政策学部27.2%、文学部12.4%となっており、その次に理工学部が11.3%で5番目となっている。逆に「まったく接していない」では、法学部が44.4%でトップとなり、続いて社会学部36.6%、教育学部36.5%、文学部35.7%、商学部32.8%と続いている。法学部では、外国人留学生が少ないことがこの結果に出ているのではないと思われる。文学部は「日常的に接している」と「まったく接していない」の双方に登場し、学部内での学科によるカリキュラムの違いがこの結果に出ていると考えられる。

「日常的に接している」の結果のみを学年別にみると、2年生の接触度が21.6%と最も高く、必修外国語の授業が終了した4年生7.8%が最も低い。性別では、女性の比率が13.6%で男性10.5%よりもやや高い。入試区分では、外国人留学生入試で入学した外国人留学生が最も高く56.5%、続いてグローバル入試37.5%、帰国生徒入試25.0%、AO入試16.4%の順となっている。そのほか自宅、自宅外では自宅外がやや多く、団体別では、団体不参加者が団体参加者を上回っている。

図Ⅱ-21 留学生や外国人教職員との接触度



## 22. 海外プログラムへの参加

### Summary

72.7%の学生は、留学プログラムに参加したことがないと回答している。

男女別では女性の方が、参加率が約2倍高い結果となった。また、留学期間については、約6割の学生が1ヶ月以内という回答であった。

なお、留学プログラムに参加しない理由で、最も多かったのは、「他の活動を優先したい」であった。

Q19-1. あなたは海外プログラム（留学・外国語研修など）に参加したことがありますか。  
一度でも参加したことがある場合は、「1 ある」としてください。

- 1 ある                      2 計画している                      3 ない

Q19-2. Q19-1で1、もしくは、2と答えた方にお尋ねします。

滞在期間をお答えください。複数回参加したことがある場合は、最も長い期間に○をつけてください。

- 1 1ヶ月以内で長期休暇期間中                      2 3ヵ月から5ヵ月（1学期）期間内  
3 6ヶ月以上1年未満                      4 1年以上

Q19-3. Q19-1で3と答えた方にお聞きします。

海外プログラム（留学・外国語研修など）に参加しない理由はなんですか。最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- 1 興味がない                      2 経済的に難しい                      3 他の活動を優先したい  
4 外国語運用能力が足りない                      5 その他（                      ）

Q19-1（海外プログラムの参加）では、15.8%が「ある」と回答し、72.7%が「ない」、10.9%が「計画している」と答えている。「ある」を学部別にみると比率の高い順に、国際学部がトップの63.6%で、続いて神学部33.3%、総合政策学部21.9%、社会学部17.1%、文学部15.1%、法学部10.3%、経済学部10.3%、商学部10.1%、人間福祉学部9.9%、教育学部9.4%、理工学部8.8%となっている。実験等で大学を離れられない理工学部や教員免許状などの資格取得のある教育学部等では留学参加の比率が低くなっている。男女別では、女性の比率が19.8%に対して男性は10.0%と低くなっている。自宅、自宅外では大きな差がない。団体では「団体不参加者」の20.9%に対して、「団体参加者」14.0%が低くなっている。これはクラブ活動での練習や試合等で海外プログラムに参加する時間が取れないことが原因の1つに考えられる。

Q19-2（留学期間）では、58.5%が「1ヶ月以内で長期休暇期間中」と回答し、20.8%が「3ヵ月から5ヵ月（1学期）期間内」、14.2%が「6ヶ月以上1年未満」、4.5%が「1年以上」と答えている。なお、「1年以上」は海外プログラムとしては、ダブルディグリーを除くと制度がないので、回答の中には、交換留学1年間のプログラム（実際には1年未満）を解釈によって1年以上のとして回答した者も含まれると考えられる。以下「1ヶ月以内の長期休暇期間中」（短期プログラム）と、「6ヶ月以上1年未満」（交換留学プログラムなど）の回答を中心に分析する。ただし、これらは全体の回答者数が少なく、また学部によって回答者数に大きな差があり、項目ごとに比較できるデータにはないので参考程度のもので考えたい。

「1ヶ月以内の長期休暇期間中」（短期プログラム）を学部別にみると、学部内の比率の高い順位

に並べると理工学部88.9%でトップ、続いて教育学部、文学部、法学部、社会学部、人間福祉学部、経済学部、総合政策学部、商学部、神学部、国際学部24.5%の順となっている。一方、「6ヶ月以上1年未満」（交換留学など）では、逆に国際学部38.8%がトップで、続いて教育学部、経済学部、総合政策学部、社会学部、商学部、人間福祉学部、法学部、文学部、神学部、理工学部0.0%の順となっている。

GPAとの関連をみると、GPAが高い層ほど長い留学期間の比率が増える傾向がある。入試区分でみると、「1ヶ月以内で長期休暇期間中」では、推薦入試、帰国生徒入試、一般入試、スポーツ推薦入試での入学者の比率が他の入試より高く、「3ヵ月から5ヵ月（1学期）期間内」では、逆にセンター利用入試、AO入試で入学者の比率が前述の入試より高くなっている。また「6ヶ月以上1年未満」ではグローバル入試、帰国生徒入試、AO入試での入学者の比率が高くなっている。なお、居住形態、団体別では大きな特質はみられなかった。

Q19-3（留学しない理由）では、23.3%が「他の活動を優先したい」、23.2%が「経済的に難しい」、21.7%が「興味がない」、19.6%が「外国語運用能力が足りない」、3.9%が「その他」と答えている。

これを学部別にみると、「他の活動を優先したい」が経済学部（32.6%）、商学部（25.6%）、総合政策学部（20.3%）、人間福祉学部（27.3%）の学部で最も高い数値となっており、「経済的に難しい」が神学部（33.3%）、文学部（26.4%）、法学部（26.7%）、商学部（25.6%）、総合政策学部（20.3%）、教育学部（27.4%）で最も高い数値となっている。また「外国語運用能力が足りない」が社会学部（25.6%）で最も高い数値となっている。そして「興味がない」が理工学部（29.6%）、総合政策学部（20.3%）で最も高い数値となっている。なお、商学部では、「経済的に難しい」と「他の活動を優先したい」が同率25.6%で、総合政策学部では「経済的に難しい」「他の活動を優先したい」、「興味がない」の3つが同率20.3%で海外プログラムに参加しない理由の最も高い数値となっている。

学年別では、1年生と3年生では「経済的に難しい」（25.0%、28.9%）が、2年生と4年生では、「他の活動を優先したい」（24.7%、28.3%）が最も高くなっている。男女別では、男性は「他の活動を優先したい」（25.9%）で、女性は「経済的に難しい」（26.1%）が最も高い数値になっている。

GPA別では、GPA2.99～2.00、4.00～3.00では「他の活動を優先したい」が、1.99～1.00では「経済的に難しい」、0.99～0.00では「他の活動を優先したい」が最も高くなっている。

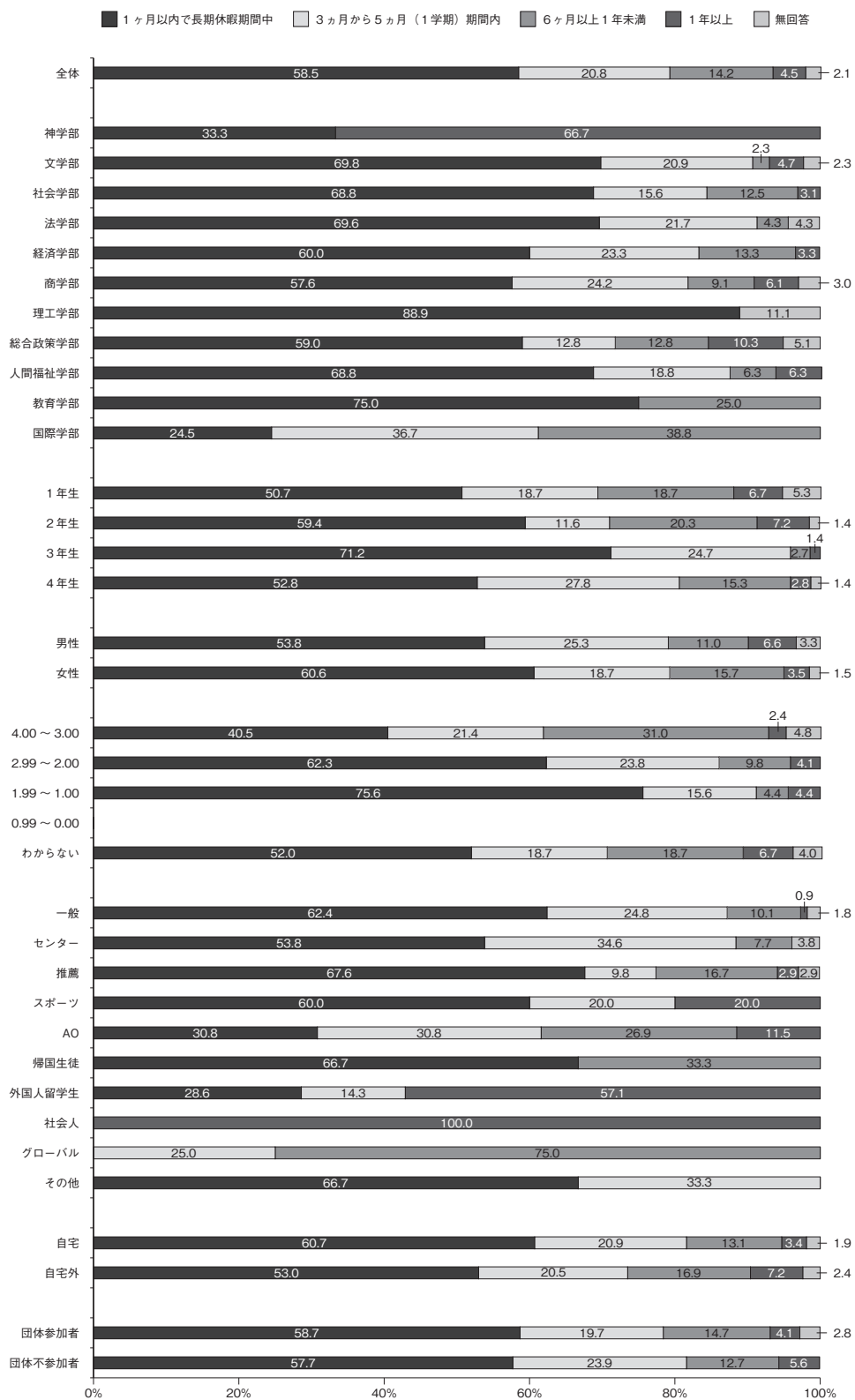
入試区分では、一般入試、外国人留学生入試では、「経済的に難しい」が、センター利用入試、スポーツ推薦入試、AO入試では、「他の活動を優先したい」が、推薦入試では「外国語運用能力が足りない」が、最も高い数値となっている。

自宅、自宅外の別では、自宅は「経済的に難しい」、自宅外では「他の活動を優先したい」が最も高い。団体別では、団体参加者では「他の活動を優先したい」が、団体不参加者では、「興味がない」が最も高かった。

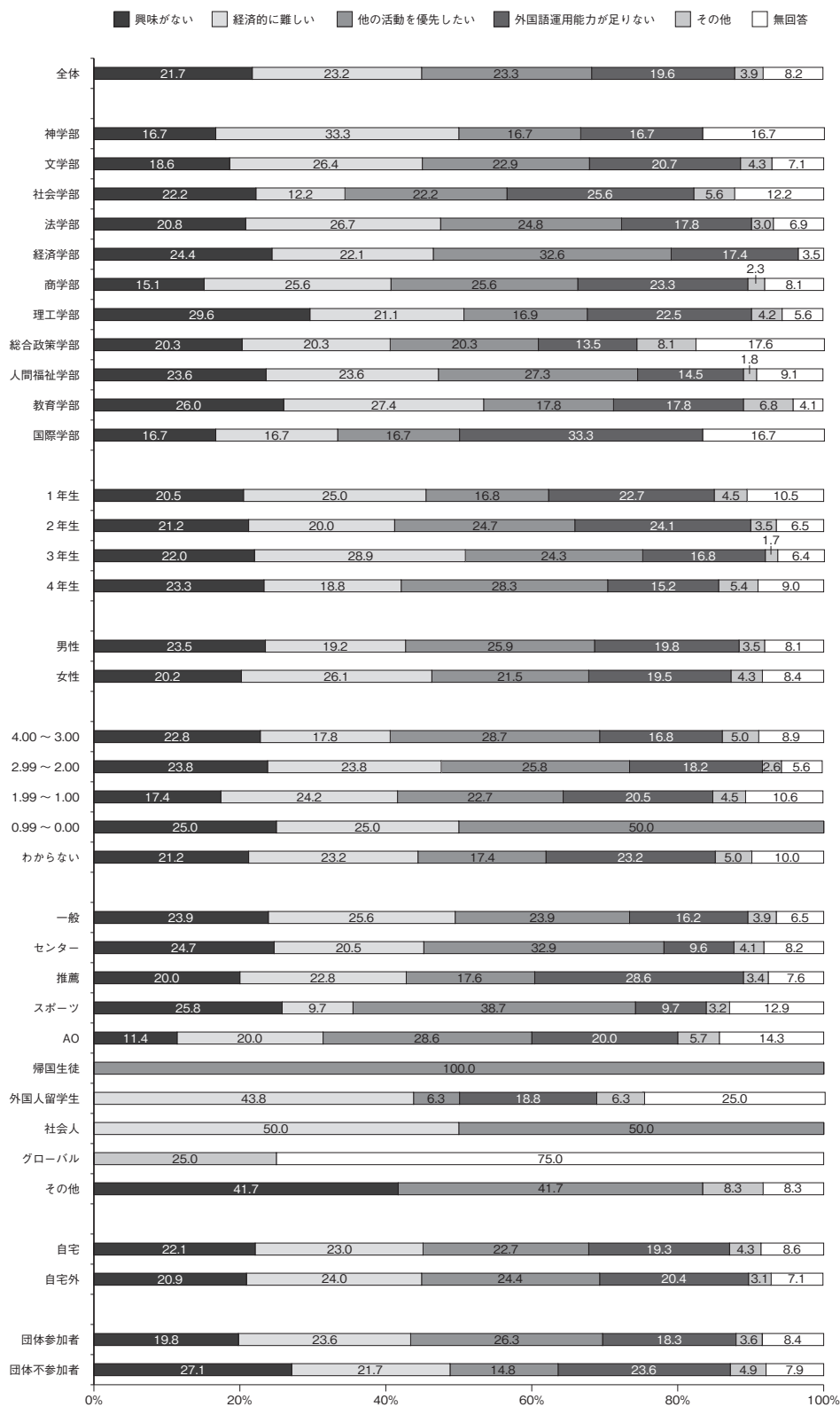
図Ⅱ-22-1 海外プログラムへの参加度



図Ⅱ-22-2 参加した海外プログラムの滞在期間



図Ⅱ-22-3 海外プログラムに参加しない理由





## 23. 留学環境の整備状況

### Summary

66.5%の学生は、留学環境の整備状況が「整っている」と回答。

「整っていない」要因としては、①経済的な側面（奨学金等）、②広報の不足、③海外に興味がない、④プログラム参加に求められる外国語能力と学力レベルのギャップに大別される。

Q20-1. 本学は、学生が海外プログラム(留学・外国語研修など)に参加できる環境を整えていると思いますか。最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

1 整っている                      2 どちらともいえない                      3 整っていない

Q20-2. Q20-1で2または3と答えた方にお尋ねします。なにが不足していると思いますか

留学環境の整備については、今回の調査で新しく追加した項目である。

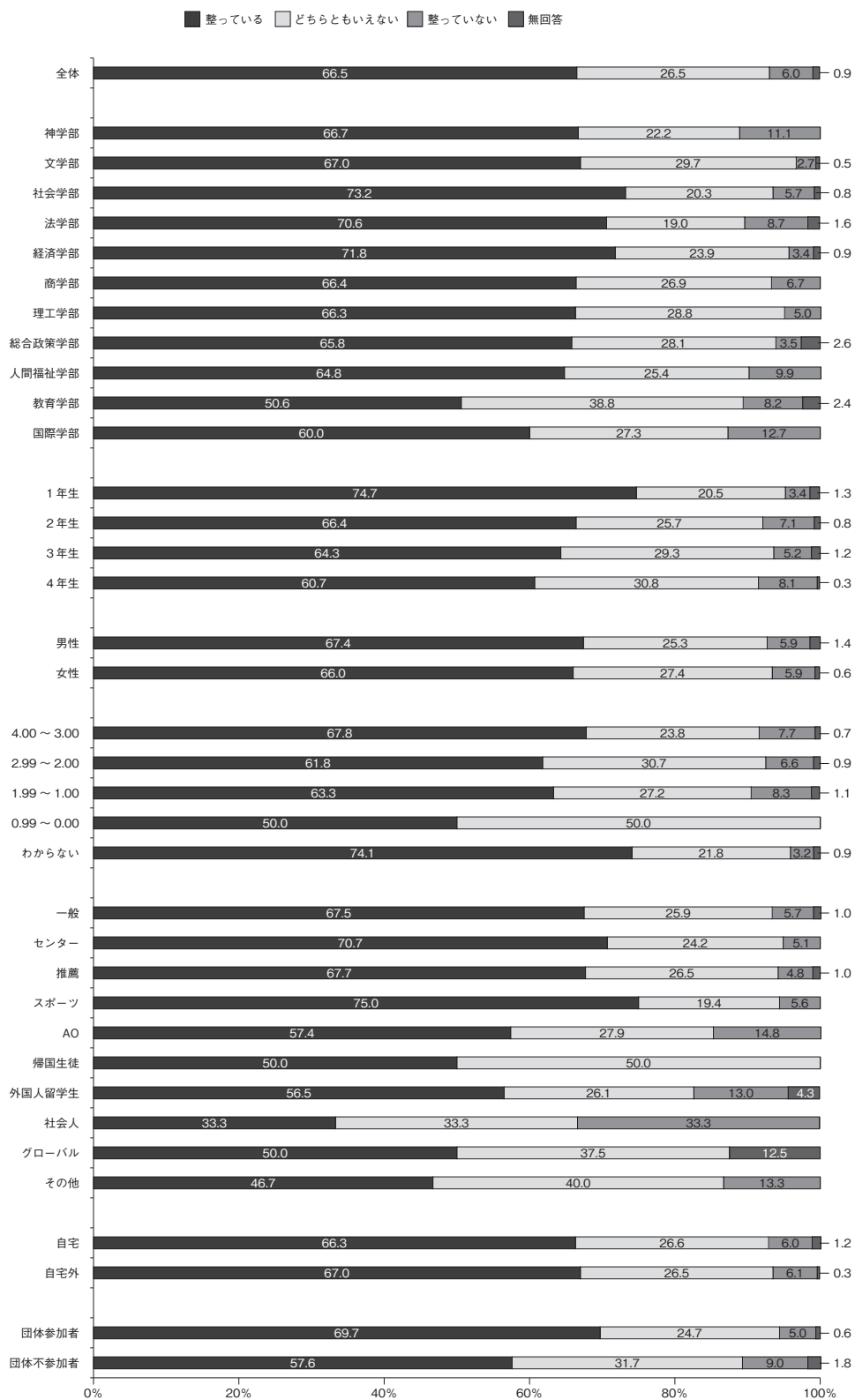
全体では、66.5%が「整っている」と答えている。一方、「どちらともいえない」が26.5%、「整っていない」が6.0%となっており合わせると、32.5%となる。「整っている」の回答率について学部別にみてもみると、教育学部のみ6割を下回っている。Q20-2のコメントを併せて考察すると、教職取得を目的としたカリキュラムのため、長期間の留学には参加しにくいことと、西宮聖和キャンパスでの留学説明会の開催が少ないことが主な原因として考えられる。また、留学参加が必須となっている国際学部の「整っている」の回答比率が全学部中下位から2番目であるのも特筆すべき点である。留学は国際学部生全員の大きな関心事であるため、留学の環境や大学の対応に対して他学部生よりもシビアにみている可能性があるのではないかと考えられる。GPA別では「整っている」との回答が、4.00～3.00は67.8%、2.99～2.00は61.8%、1.99～1.00は63.3%、0.99～0.00は50.0%となっている。GPA4.00～3.00(67.8%)と1.99～1.00(63.3%)では大きな隔たりはないが、GPA0.99～0.00(50.0%)とは大きな差がある。もともと海外プログラムへの関心が少ないことから起因した結果であると考えられる。GPAは交換留学では派遣先協定校の必要要件となっているが、選考時に考慮されるのは、各学部での学業成績となっている。しかし、そのほかの海外プログラムでは、GPAも学業成績も選考には影響しない。したがって、GPAと海外プログラムの関係は薄いといえる。

入試形態別では、スポーツ推薦入試75.0%、センター利用入試70.7%、推薦入試67.7%、一般入試67.5%の順番で平均値(66.5%)を超えており、以下AO入試57.4%、外国人留学生入試56.5%、グローバル入試50.0%、帰国生徒入試50.0%、社会人入試33.3%の順となっている。また、クラブ・サークル等の団体入っている学生の69.7%、入っていない学生の57.6%が「整っている」と回答し、約12ポイントの差があることがわかる。性別、居住形態の違いでは大きな差はみられない。

Q20-2では、自由記述による回答を得た。回答を大別すると主に①経済的な側面、②広報の不足、③そもそも海外に興味がない、④プログラム参加に求められる外国語能力と学力レベルのギャップの4種類が中心となっている。①の回答では「費用が高すぎる(特に語学研修の方)」や、「参加費が高い、大学側がもう少し負担してほしい」といったプログラム費の高額さや、「奨学金制度も他大学より劣っていると思う」といった金銭的補助を求める声もあった。また、「コストダウンのためアジア圏も用意してほしい」といった安価なプログラムについて提案する回答もみられる。②の回答では、「もっと説明会などを開いてほしい、少ないと思います」や、「説明会は少ないし、身近に感じられない」、「説明会などの案内の方法が悪い」、「もっと、案内をきめこまやかにアナウンスしてほしい」などの記述があった。説明会自体は主に国際連携機構において数多く開催しているため、学生に説明会をはじめとする留学に関する情報そのものが届いていないのではないかと懸念が

ある。③に関しては「自分自身興味がなく、調べたことがないため、整えているかいないかさえ分からない」や「海外プログラムのことを全く知らないので、どちらともいえない」といったそもそも海外に興味を持っていない層の回答がみられる。「全く興味がない人は少ないと思うし、参加すれば間違いなく自分のためになることも分かっているが、背中を押してくれる人がほしい。現実的に可能か分からないが学生の不安を解消することを重視することができれば参加する人は増えると思う。」といった建設的な記述もみられる。④については、「交換留学のボーダーが高すぎて、もともと英語の出来る子が主にチャンスをもっていると感じた」や、「交換留学の選考のレベルが高すぎる」等、交換留学先の協定校の必要要件を満たすことができない学生からの苦情とも不満ともいえない記述が目立った。

図Ⅱ-23 留学環境の整備状況



## 24. 通学の最寄り駅について

### Summary

各キャンパスとも従来の最寄り駅からの通学が6割以上である。なお、通学時の混雑解消などを目的に、西宮上ヶ原キャンパスはJR西宮駅からも通学区間とし、その結果、それらの駅からの利用者が増えており、従来の最寄り駅からの分散が若干ながら進んでいる。なお、神戸三田キャンパスはJR三田駅から利用者が増えている。

Q21-1. 通学についてお尋ねします。

公共交通機関を利用している方にお尋ねします。大学最寄り駅はどこですか。最も利用されるものに、1つだけ○をつけてください。

- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| 1 阪急甲東園駅  | 2 阪急仁川駅   | 3 阪急門戸厄神駅  |
| 4 J R 西宮駅 | 5 J R 三田駅 | 6 J R 新三田駅 |
| 7 その他     |           |            |

通学の最寄り駅についての質問は、それぞれのキャンパス最寄り駅より通学する学生数から、通学路の混雑具合を確認することを目的としている。特に西宮上ヶ原キャンパスと西宮聖和キャンパスはキャンパスが近いことから、最寄り駅である阪急甲東園・仁川・門戸厄神各駅からの通学者数を総合的に確認する必要がある。また、神戸三田キャンパスにおいては、JR新三田とJR三田の利用者割合を確認することを目的とした。

公共交通機関を利用している学生のみ調査している設問であるため、無回答の学生については、公共交通機関以外（徒歩、バス、自転車、バイク等）と考えられる。なお、無回答（徒歩、バス、自転車、バイク等）の学生は、各キャンパスとも20%程度いることがわかる。

次に、前述のとおり、本設問の目的は通学路の混雑具合を確認であることから、無回答者を除く回答者数を100とし、再集計を行った。西宮上ヶ原キャンパスにおいてJR西宮駅を最寄り駅としている学生の割合は5.0%。これは前回調査時が3.3%だったので、1.7ポイントの上昇となる。逆に阪急甲東園駅・仁川駅の割合が前回よりそれぞれ0.2ポイント、0.4ポイント下降しており、僅かながら甲東園や仁川から通学する学生が分散したと捉えることができる。その理由については不明だが、JR西宮駅の利便性が高まれば、通学の際に最寄り駅として利用する学生が増える可能性もあると考えられる。

神戸三田キャンパスではJR新三田駅を最寄り駅とする学生が60.8%で、前回調査時62.5%より1.7ポイント減った。その一方で、JR三田駅を最寄り駅とする学生が21.5%と、前回調査時19.9%より1.6ポイント上昇している。JR三田駅から通学する学生数が徐々に増えてきていると考えられる。

西宮聖和キャンパスに通う学生は94.1%が阪急門戸厄神駅を最寄り駅としているが、これは前回(93.0%)よりも1.1%上昇したことになる。逆にJR西宮駅を最寄り駅としている学生の割合は2.9%で、前回(3.5%)よりも0.6ポイント減少している。

図 II-24-1 キャンパスごとの通学の最寄り駅について

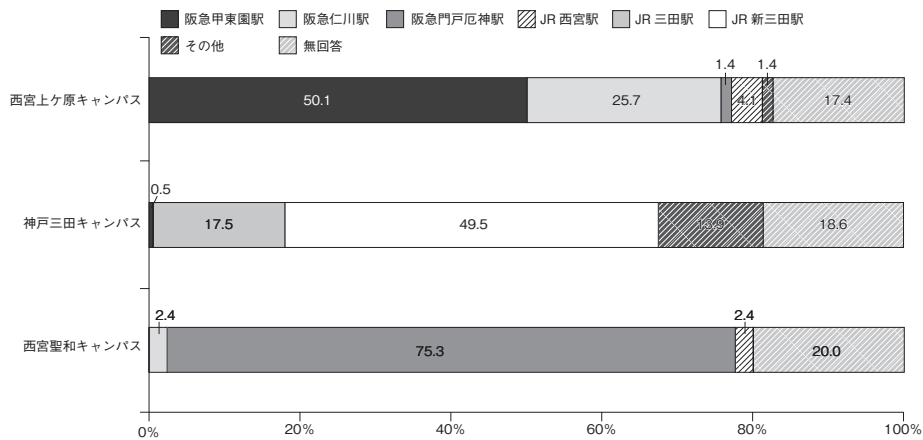
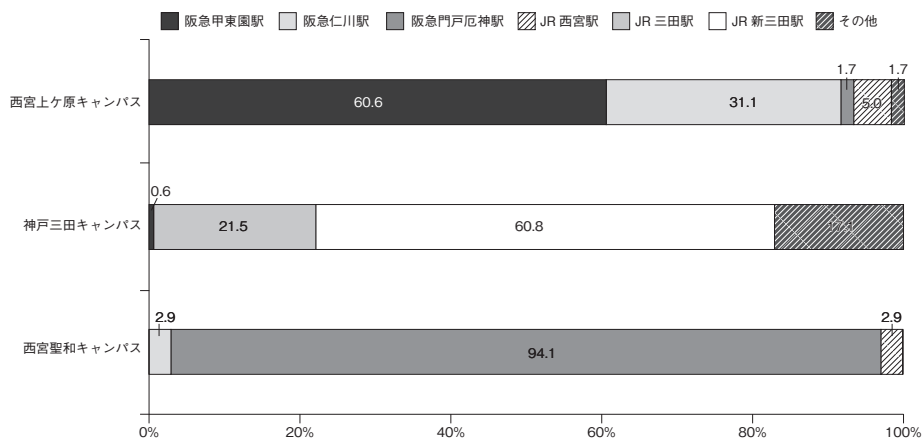
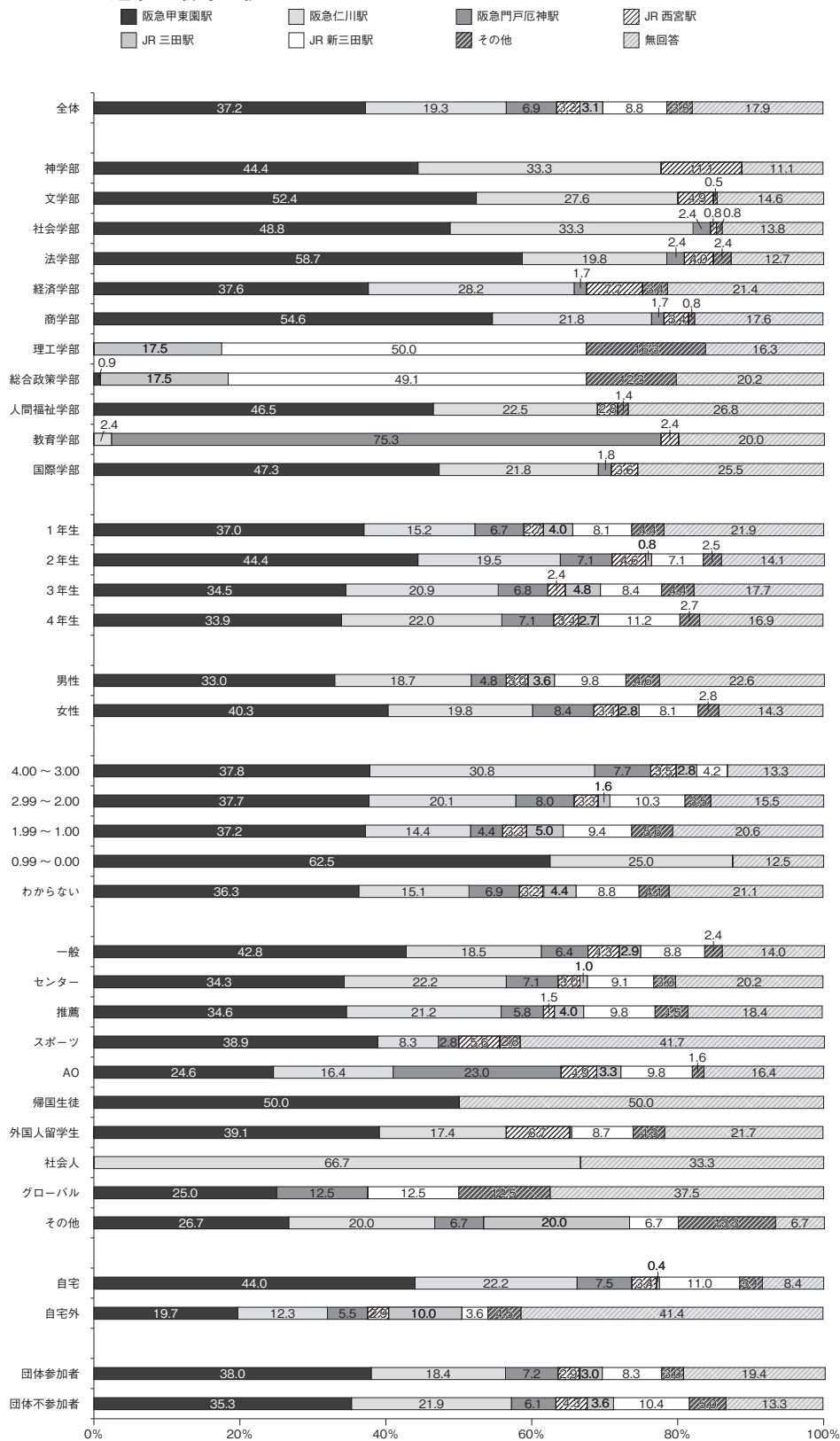


図 II-24-2 キャンパスごとの通学の最寄り駅について（無回答者を除く）



図Ⅱ-24-3 通学の最寄り駅について



## 25. 通学手段ならびに自転車・バイクの駐輪場所

### Summary

西宮上ヶ原キャンパス、西宮聖和キャンパスでは、約6割が「徒歩」通学であり、神戸三田キャンパスの7割超が「バス」通学である。なお、一時預かりを含めて駐輪場を借りている学生が8割と前回の6割から大幅に伸びており、また、不法駐輪の回答も0となっていることから、不法駐輪の懸念は後退している結果となった。

Q21-2. 大学最寄り駅または、自宅から大学までの通学手段は何ですか。

最も利用されるものに、1 つだけ○をつけてください。

- |              |       |       |
|--------------|-------|-------|
| 1 徒歩         | 2 バス  | 3 自転車 |
| 4 50cc以下のバイク | 5 その他 |       |

Q21-3. 大学最寄り駅から自転車、バイクで通学している方にお尋ねします。

自転車・バイクを最寄り駅付近のどこに置いていますか。最もあてはまるものに、1 つだけ○をつけてください。

- |             |                   |       |
|-------------|-------------------|-------|
| 1 駐輪場を借りている | 2 一時預かりの駐輪場に置いている |       |
| 3 友人宅に置いている | 4 不法駐輪している        | 5 その他 |

通学手段について調査を行い、西宮上ヶ原キャンパスでは徒歩通学者が58.6%で前回より2.9ポイント減少した。しかし、自転車通学者が前回11.7%から14.2%と2.5ポイントの上昇となっており、通学路を徒歩または自転車で移動する学生数は0.4ポイントの減少となっている。神戸三田キャンパスのバス通学者は74.7%で、前回の66.7%より8ポイント増加している。西宮聖和キャンパスでは徒歩通学者の割合が前回71.2%から今回65.9%と5.3ポイントも減少、自転車も21.2%から18.8%へと2.4ポイントの減少となっている。とはいえバス通学が4.5%から4.7%とその分増えたわけでもなく、原付の増加も1.5%から2.4%と0.9ポイントの上昇に留まっており、「その他」の増加が目立つ結果となった。

原付（総排気量50未満のバイク）での通学については、自粛としている西宮上ヶ原キャンパスで前回10.1%から今回5.8%と4.3ポイントも減少し、ピラの配布などにより周知が進んでいる一方、禁止としている西宮聖和キャンパスでは前回1.5%から今回2.4%と若干ながら増加しており、西宮聖和キャンパス近隣の不法駐輪の問題等が懸念される。

学年ごとの傾向では、学年が上がるごとに徐々にではあるが徒歩の割合が減り、バス通学および自転車通学の割合はさほど変わらず、原付、その他が微増している。4年次には就職活動もあり、移動に時間をかけられない事情もあるが、下宿生比率も増加する傾向にあるため、これらの要因が重なっているのではないかと推察される。

男女別にみると、女性は過半数が徒歩にて通学、バスも合わせれば実に80%に達するが、比率だけで言えば男性は自転車や原付を好んで利用すると言える。自宅生か自宅外生かという視点で比較すれば、当然ながら自宅生の方が徒歩やバスは多くなる。

学生活動をしているかどうかでみれば、当然ながら徒歩やバスは何もしていない学生の方が利用は多くなり、参加者は原付や自転車の比率が高まっている。早朝に集まる、あるいは午後11時まで活動する場合はバスもなく、少なくとも駅までは原付か自転車で移動することを余儀なくされるからであろう。この比率の差は、前回調査と同じ傾向にある。

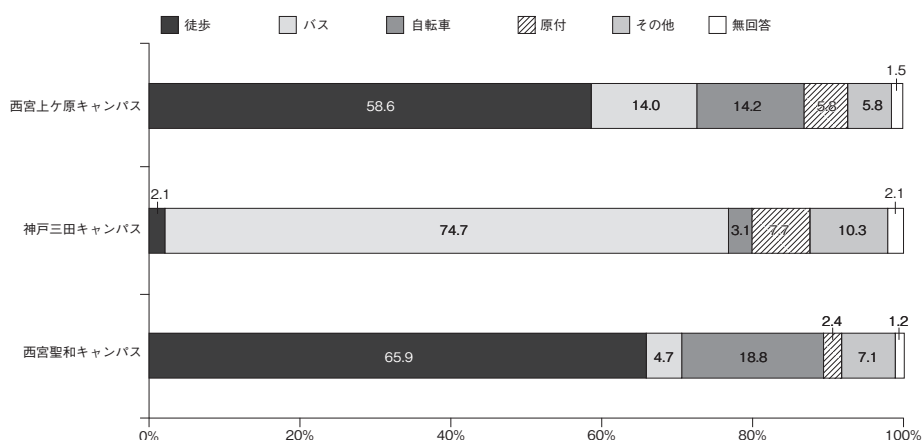
次に、大学最寄り駅から自転車または原付で通学していると回答した学生200名を対象に、どこ

に駐輪しているかを質問した。

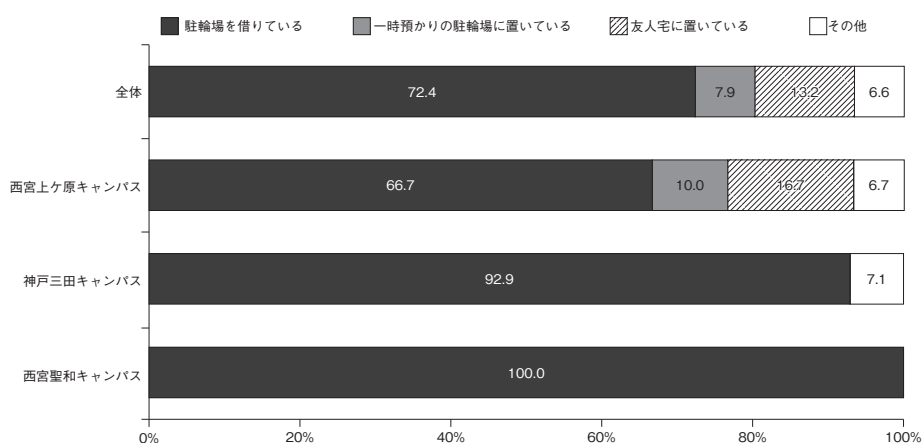
全体的には駐輪場を借りているとの回答が72.4%と前回調査時の52.0%を大きく上回る結果となった。一時預かりを含めると80.3%になり、前回の59.1%よりも21.2ポイントの増加という喜ばしい結果となった。しかしながら、友人宅に置いていると回答しているが学生が西宮上ヶ原キャンパスのみで16.7%おり、この中には学生マンションなどで家主・オーナーに対し無断で駐輪している可能性があり、注意が必要である。また、前回では3.1%が不法駐輪していると回答していたが、今回はなんと0.0%となった。「その他」と回答しているのが6.6%あるが、これがどこを指しているのかはわからない。

自宅外生は駐輪場を借りている割合がかなり高く、自宅生は友人宅やその他が比較的多くなっている。また、団体に参加している学生より不参加の学生の方が駐輪場を借りて止める率が高くなっている。

図Ⅱ-25-1 通学手段（キャンパスごと）

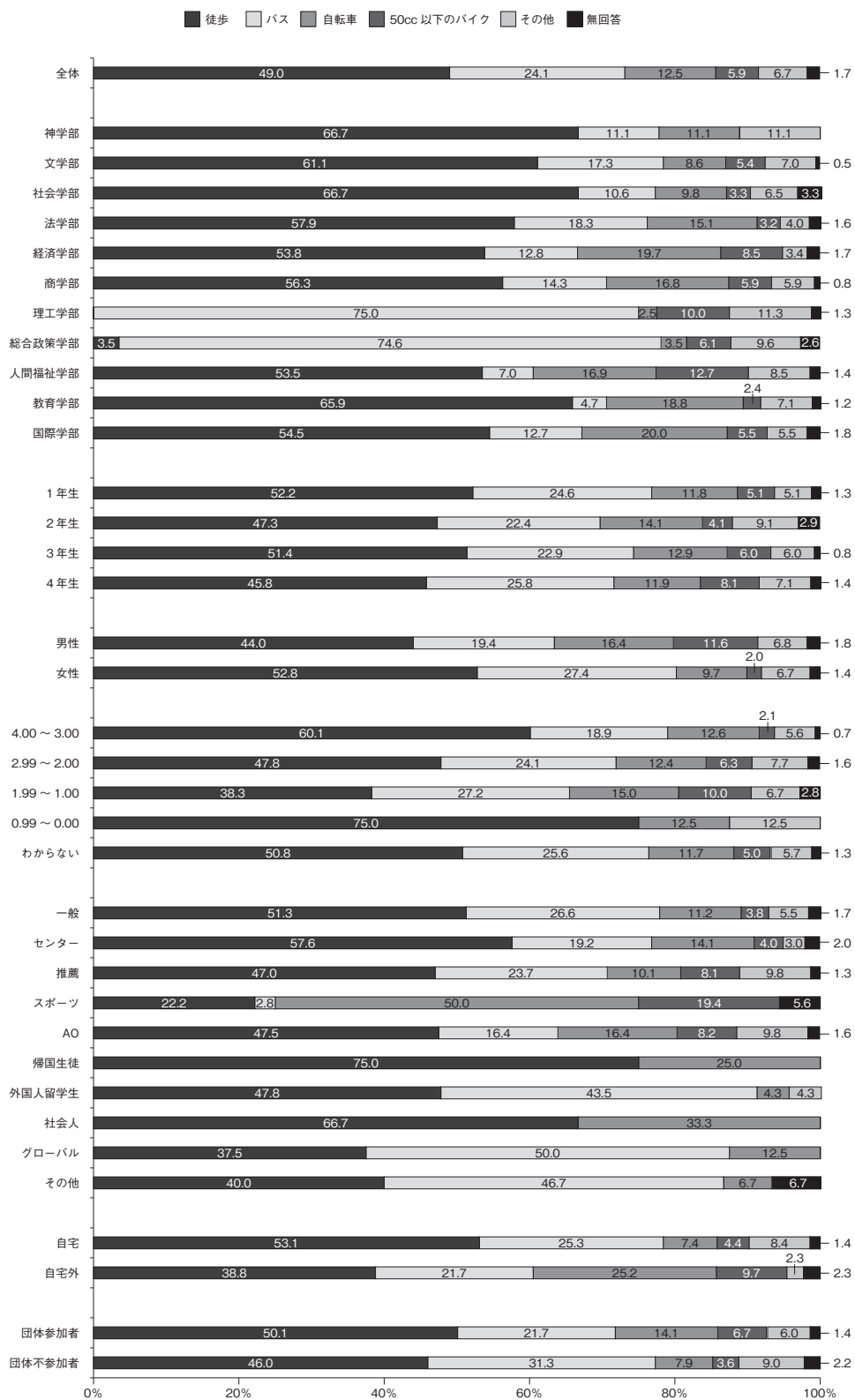


図Ⅱ-25-2 自動車・バイクの駐輪場所（無回答者を除く。キャンパスごと）

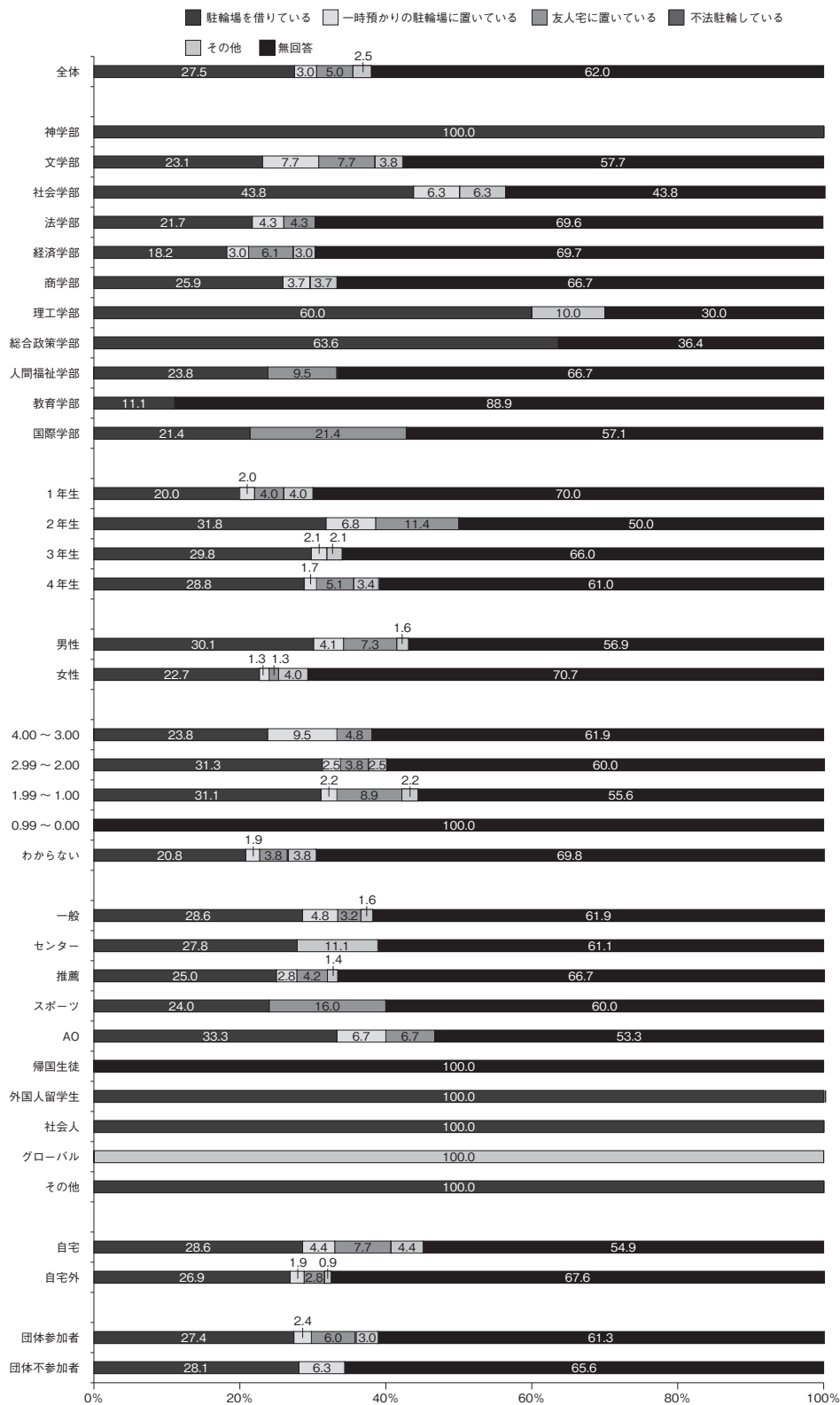




図Ⅱ-25-3 通学手段



図Ⅱ-25-4 自動車・バイクの駐輪場所



## 26. 大学での昼食

### Summary

この2年間で神戸三田キャンパスと西宮上ヶ原キャンパスにそれぞれ外部業者の食堂が新設され、飲食スペースも拡大したが、「弁当や惣菜などを買って食べる」(31.9%)、「自宅から持ってきた弁当などを食べる」(31.7%)、「食堂利用」(31.6%)と、前回調査と順位は変わらない結果となった。ただ、回答の割合の差は、前回調査より縮まっていることから、今後の推移を見守りたい。

また、「食堂利用」の学生の自由記述からは、「食堂の狭さ」や「食堂の混雑」など、「食事のスペース」についての指摘が多くあった。

Q22-1. あなたは大学で昼食をどのようにとりますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |                     |          |
|---------------------|----------|
| 1 自宅から持ってきた弁当などを食べる | 2 食堂で食べる |
| 3 弁当や惣菜などを買って食べる    | 4 食べない   |
| 5 その他               |          |

Q22-2. あなたは昼食をどこでとりますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |                        |          |
|------------------------|----------|
| 1 学内の食堂                | 2 学外の飲食店 |
| 3 学内の部屋（ラウンジスペース・教室など） |          |
| 4 中央芝生などキャンパスの屋外で      | 5 その他    |

大学での昼食については、調査項目は前回と同様であり、「弁当や惣菜などを買って食べる」が31.9%（前回37.2%）、次に「自宅から持ってきた弁当などを食べる」が31.7%（29.8%）の順で、「食堂利用」は3番目、31.6%（28.9%）と、前回と同じ回答数順となった。食堂（業者等を含む）で作られるものを食べる学生が約3割であり、大半が弁当に頼っている要因が、食堂の狭さや時間のなさにあるのではないかと懸念される。また、僅かだが「食べない」2.6%（2.9%）との回答もあった。

学部（キャンパス）別にみると、理工学部は66.3%、総合政策学部は62.3%と神戸三田キャンパスの食堂利用率はかなり高くなっている一方で、「弁当や惣菜などを買って食べる」率は約1割程度とかなり低くなっている。西宮上ヶ原キャンパスでは、経済学部を除き「弁当や惣菜などを買って食べる」、「自宅から持ってきた弁当などを食べる」が多い。教育学部では回答者の半数以上が「自宅から持ってきた弁当などを食べる」となっている。これらはキャンパス周辺の環境が大きく影響していると思われる。

男女別にみると、男女差が大きくでたのは、「食堂利用」と「自宅から持ってきた弁当などを食べる」の項目であり、男性は食堂で食べる率が最も高く、50.3%（46.9%）と半数を超える一方、女性は「自宅から持ってきた弁当などを食べる」が最も高く、43.9%（40.8%）となっている。女性の場合、食堂にいても、持参した弁当を食べているケースが見受けられ、食堂の利用は少なく、18.8%しかない。

次に、自宅生と自宅外生との比較であるが、自宅生が一番多い回答は、「自宅から持ってきた弁当などを食べる」の39.5%であり、約4割を占めている。おそらく、ここには通学途中のコンビニやベーカリー等で購入したのも含まれているものと推察される。自宅外生の一番多い回答は、「食堂利用」であり、45.0%である。

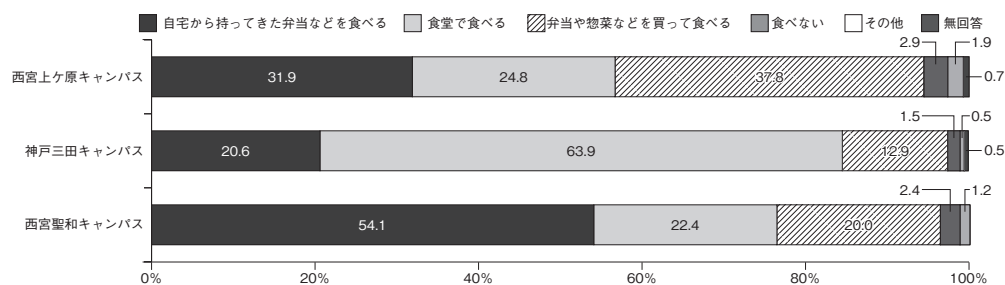
Q22-2の昼食を食べる場所であるが、回答が最も多いのは「学内の部屋（ラウンジスペース・教室など）」であり、53.6%（52.1%）と半数以上を占め、次に「学内の食堂」が36.2%（34.9%）という結果である。「学外の飲食店」は0.7%（1.1%）と、他の項目と比較して極端に少なくなっているが、これは3キャンパス共通して、周辺に飲食店が少ないことから、当然の結果であろう。また、「その他」として、「（サークル・クラブの）部室」や「寮」という回答が目立った。この2つの回答数の方が「中央芝生などキャンパスの屋外」を上回った。次に学部別にみると、「学内の食堂」の割合が多いのは、理工学部が75.0%、総合政策学部が80.7%と神戸三田キャンパスの学部である。これはQ22-1の質問項目で「食堂利用」が多い学部であることから、当然の結果である。それ以外の学部では、回答が最も多いのは「学内の部屋（ラウンジスペース・教室など）」であった。

男女別にみると、男性は「学内の食堂」で食べる割合が49.7%（49.5%）とほぼ半数であるのに対して、女性は「学内の部屋（ラウンジスペース・教室など）」で食べる割合が実に66.5%（66.2%）に達している。一方で女性の食堂利用の割合が27.1%（24.2%）しかない。

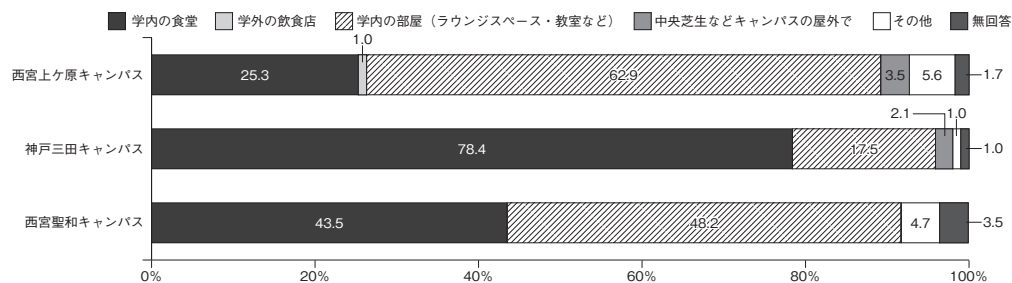
次に、自宅生と自宅外生との比較であるが、自宅生が一番多い回答は、「学内の部屋（ラウンジスペース・教室など）」で57.6%となっており、約6割を占めている。一方、自宅外生の一番多い回答は、「学内の食堂」の45.6%である。

この2年間で神戸三田キャンパスと西宮上ヶ原キャンパスにそれぞれ外部業者の食堂が新設され、飲食スペースも拡大したが、何を、どこで昼食を食べるかという点において、今回の調査結果からは、「学内の食堂」への移行には至っていない。ただ、回答の割合の差は、前回調査より縮まっていることから、今後の推移を見守りたい。自由記述の回答では、「食堂の狭さ」や「食堂の混雑」など、「食事のスペース」についての指摘が多かった。

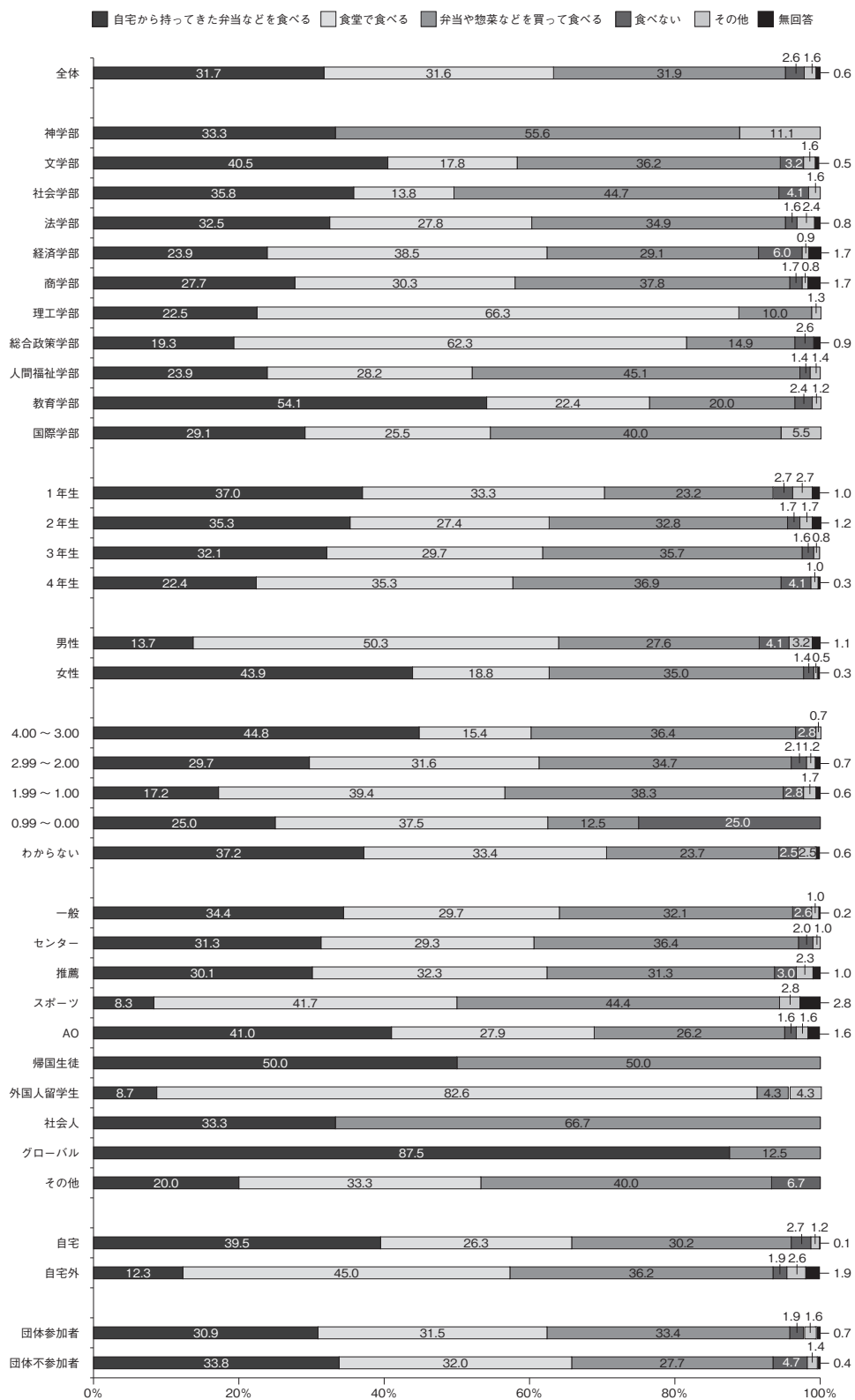
図Ⅱ-26-1 昼食をどのように食べるか（キャンパスごと）



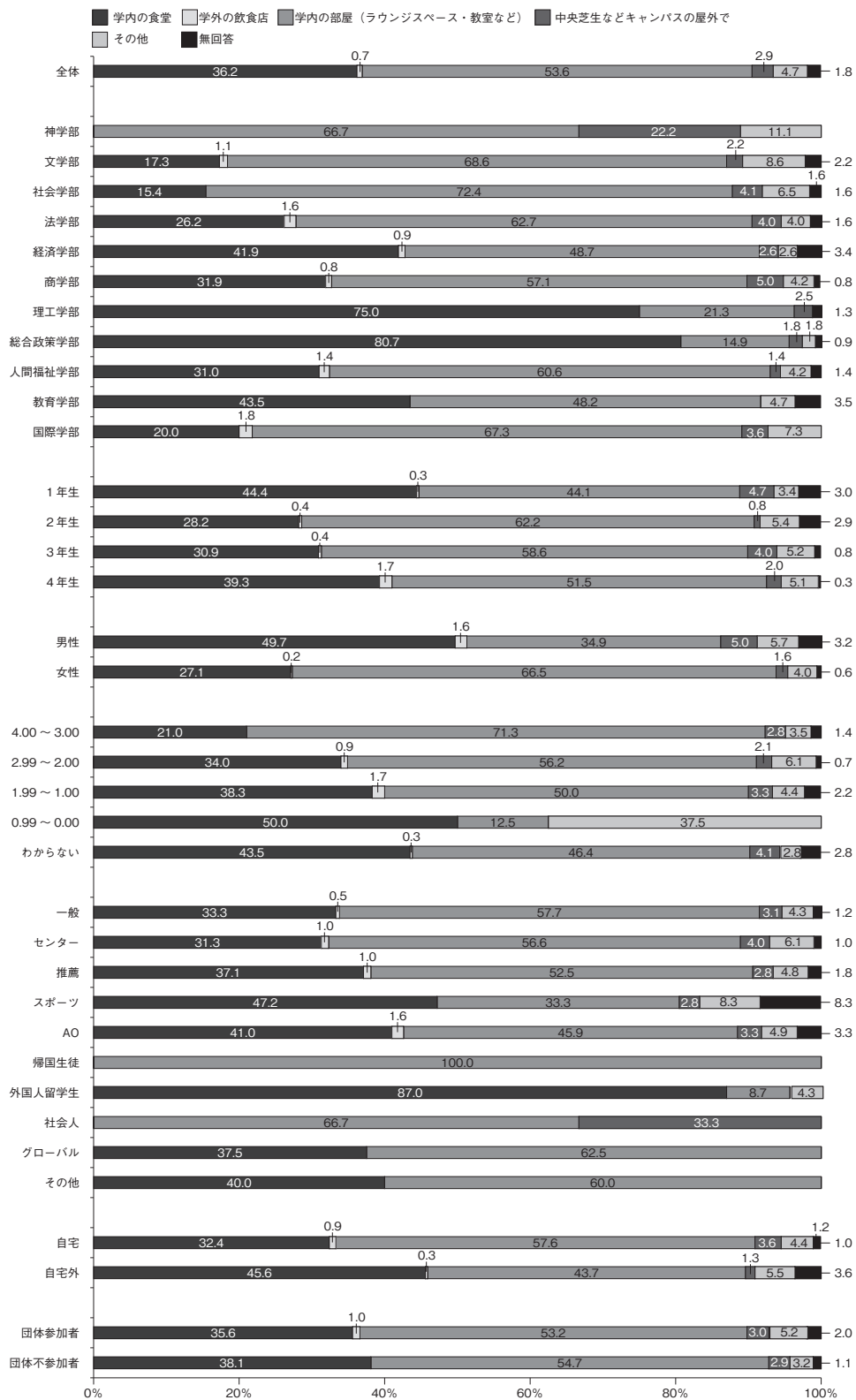
図Ⅱ-26-2 昼食を食べる場所（キャンパスごと）



図Ⅱ-26-3 昼食をどのように食べるか



図Ⅱ-26-4 昼食を食べる場所



## 27. 学内のアメニティ（生活環境の快適さ）

### Summary

教室とパソコン教室、トイレの環境については、それぞれ88.2%、88.7%、76.1%が快適さについては満足している結果となった。食堂については39.4%が快適さについて、不満足傾向があり、前回よりも不満足としている層が増加している。なお、トイレについては西宮聖和キャンパスでは、快適さの割合が低い結果になるなど、キャンパス間での快適度に差がある。

- Q23. 本学のアメニティ（生活環境の快適さ）について総合的にどう感じますか。  
A～Dについて、それぞれ1（快適でない）から4（快適である）までの数字を選んで○をつけてください。
- A. 教室      B. パソコン教室      C. 食堂      D. トイレ

学内のアメニティ（生活環境の快適さ）を調査するため、教室、パソコン教室、食堂、トイレについて、それぞれ4段階（快適である、やや快適である、あまり快適でない、快適でない）で評価してもらった。前回調査からは、「パソコン教室」が新たに調査対象に加わっている。また、評価も5段階から4段階に変更し、一部ワーディングも変更（「不快」を「快適でない」になど）して実施した。各調査対象別の結果は以下の通りであった。

### A. 教室

各項目の回答結果は図Ⅱ-27-1のとおりである。全体では、「快適である」が38.2%、「やや快適である」が50.0%であるのに対し、「あまり快適でない」が9.5%、「快適でない」が2.1%となった。全体の88.2%の学生が教室環境について肯定的な回答をしている。「あまり快適でない」「快適でない」と答えた学生は11.6%いる。前回調査で否定的な選択肢を回答した学生は6.5%であった。選択肢変更の影響もあるだろうが、教室環境の快適さに否定的な層が増加していることが伺える。

所属学部別でみると、「快適である」「やや快適である」と回答した割合が最も大きかったのが国際学部（98.1%）で、次いで社会学部（95.2%）、総合政策学部（92.1%）、文学部（90.3%）、教育学部（89.4%）、理工学部（87.5%）、商学部（86.6%）、経済学部（82.9%）、法学部（82.5%）、人間福祉学部（81.7%）となっている。社会学部が前回の71.7%から95.2%に上昇した要因としては、新しい社会学部棟と隣接するH号館が竣工したことによる変化とみることができる。

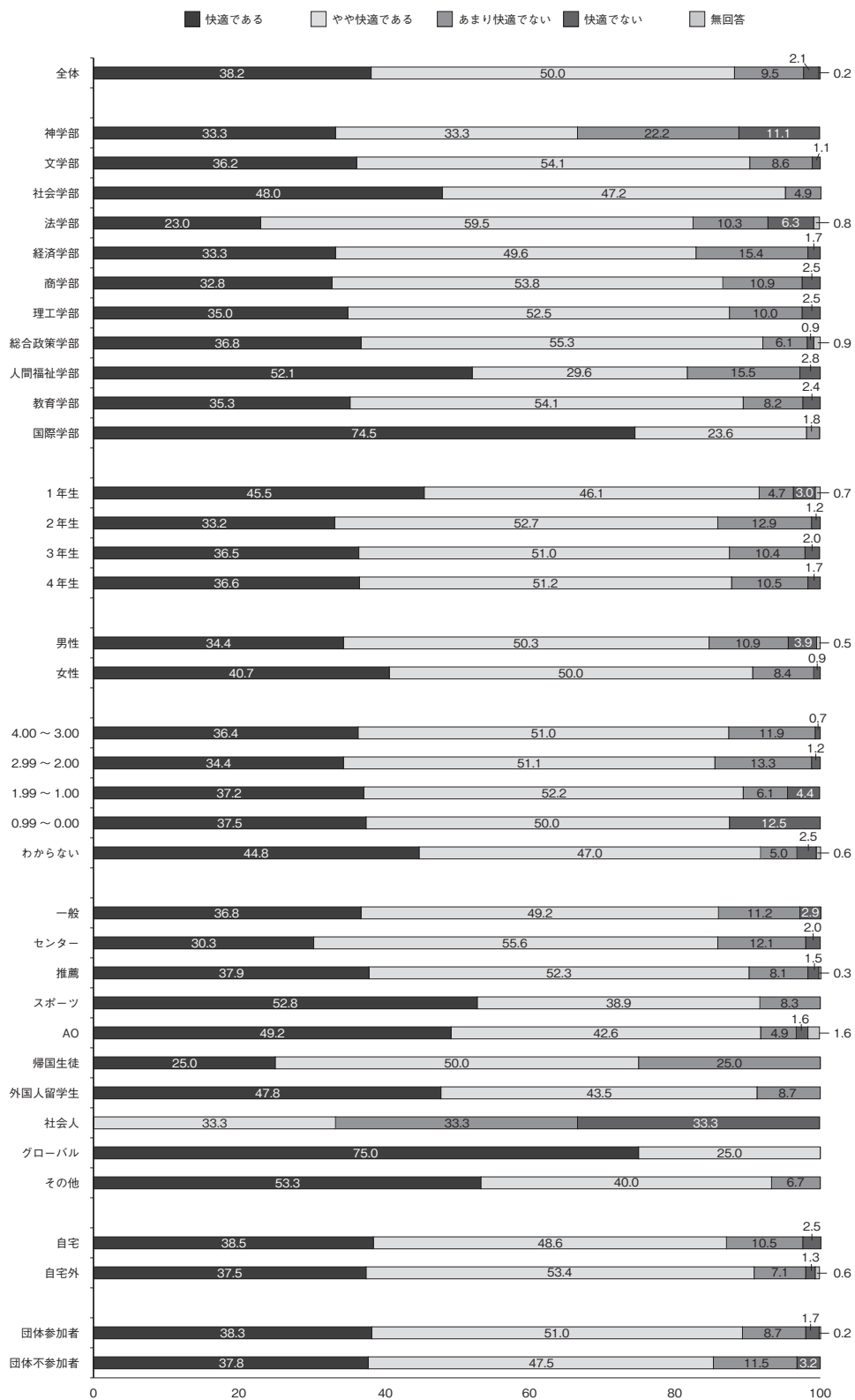
西宮上ヶ原、神戸三田、西宮聖和のキャンパスごとにみると、「快適である」「やや快適である」の割合が、それぞれ87.7%、90.2%、89.4%となっており、キャンパス間における差はあまりないという結果となった。

### B. パソコン教室

各項目の回答結果は図Ⅱ-27-2のとおりである。

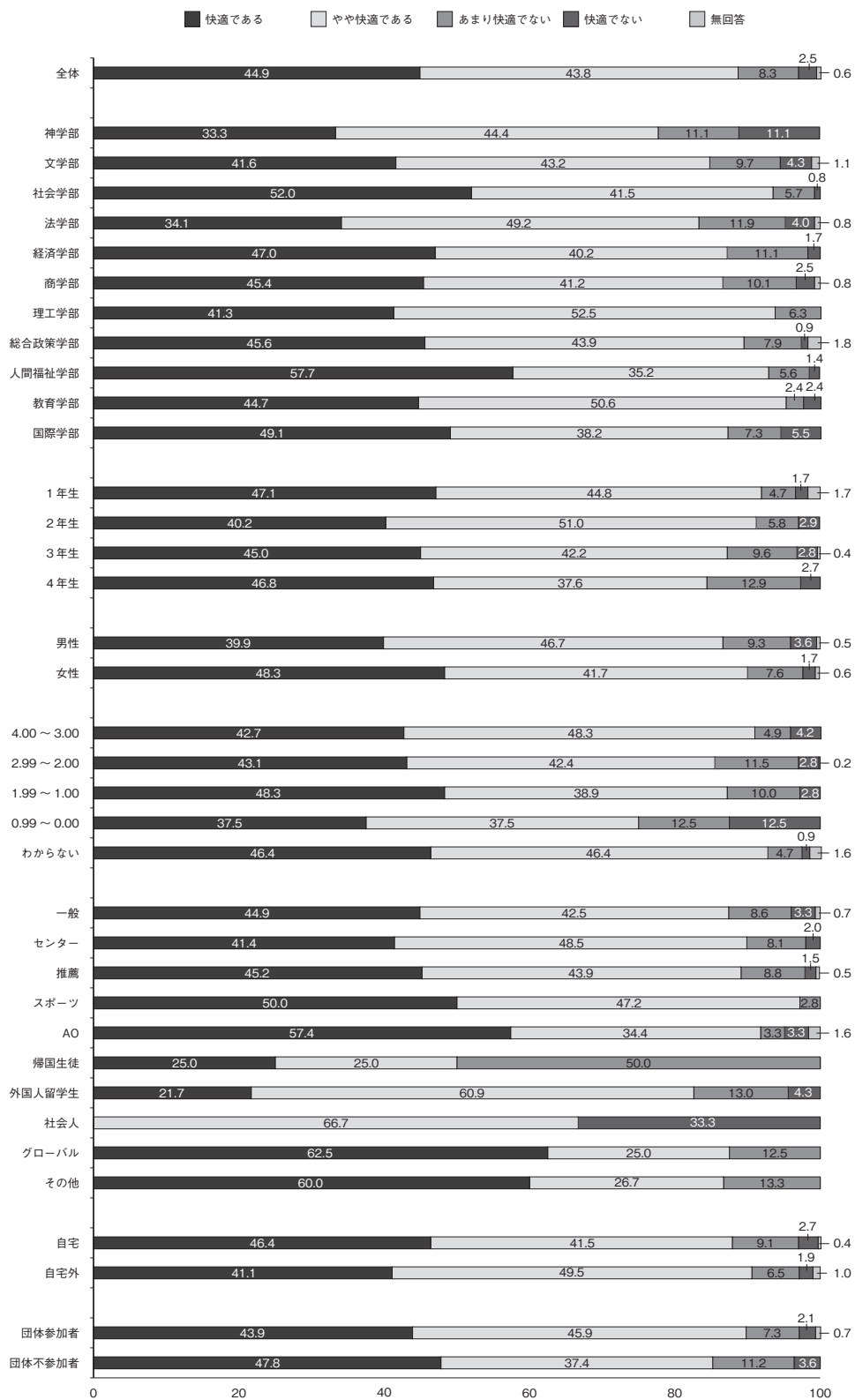
全体では、「快適である」が44.9%、「やや快適である」が43.8%であるのに対し、「あまり快適でない」が8.3%、「快適でない」が2.5%となった。全体の88.7%の学生がパソコン教室について満足している。前回調査で、「パソコン教室」については聞いていないため、比較はできないが、概ね学生たちが満足していることが伺える。

図Ⅱ-27-1 学内のアメニティ（生活環境の快適さ） A 教室





図Ⅱ-27-2 学内のアメニティ（生活環境の快適さ） B パソコン教室



### C. 食堂

各項目の回答結果は図Ⅱ-27-4のとおりである。全体では、「快適である」が20.2%、「やや快適である」が40.1%であるのに対し、「あまり快適でない」が30.7%、「快適でない」が8.7%となった。全体の60.3%の学生が食堂について肯定的な回答をしている。「あまり快適でない」「快適でない」と答えた学生は39.4%おり、前回調査で、「不快」「あまり快適とは思えない」という答えた学生が33.0%であったことから、食堂の快適さに否定的な層が増加していることが伺える。

なお、入試区分では外国人留学生入試の学生の半数以上（56.5%）が「あまり快適でない」「快適でない」と回答しており、外国人留学生へのニーズの汲み取りが必要である。

居住形態別（自宅／自宅外）で変化はみられなかった。団体参加／不参加別では、「快適である」「やや快適である」の割合が参加で63.3%、不参加で51.4%となっており、不参加の学生の方が食堂環境に厳しい様子が伺える。

西宮上ヶ原、神戸三田、西宮聖和のキャンパスごとにみると、「快適である」「やや快適である」の割合が、それぞれ60.3%、60.3%、60.0%となっており、キャンパス間における食堂の快適さに差はほとんどないという結果となった。

### D. トイレ

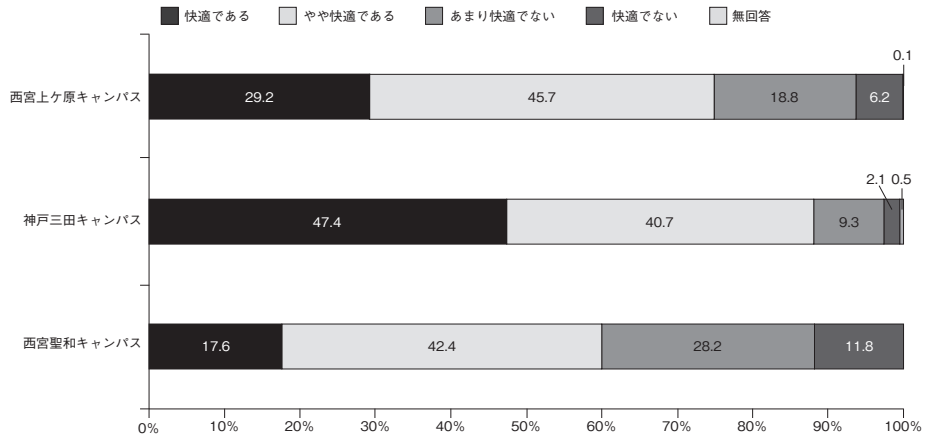
各項目の回答結果は図Ⅱ-27-5のとおりである。全体では、「快適である」が31.6%、「やや快適である」が44.5%であるのに対し、「あまり快適でない」が17.8%、「快適でない」が5.9%となった。全体の76.1%の学生がトイレの快適さについて肯定的である。「あまり快適でない」「快適でない」と答えた学生は23.7%おり、前回調査で、「不快」「あまり快適とは思えない」という答えた学生が14.3%であったことから、トイレの快適さに否定的な層が増加していることが伺える。

所属学部別でみると、「快適である」「やや快適である」と回答した割合が最も大きかったのが社会学部（91.8%）で、次いで国際学部（90.9%）、理工学部（90.1%）、人間福祉学部（90.1%）、総合政策学部（86.8%）、文学部（75.6%）、経済学部（67.5%）、神学部（66.6%、ただし神学部のサンプル数は9）、商学部（64.7%）、教育学部（60.0%）、法学部（58.7%）となっている。

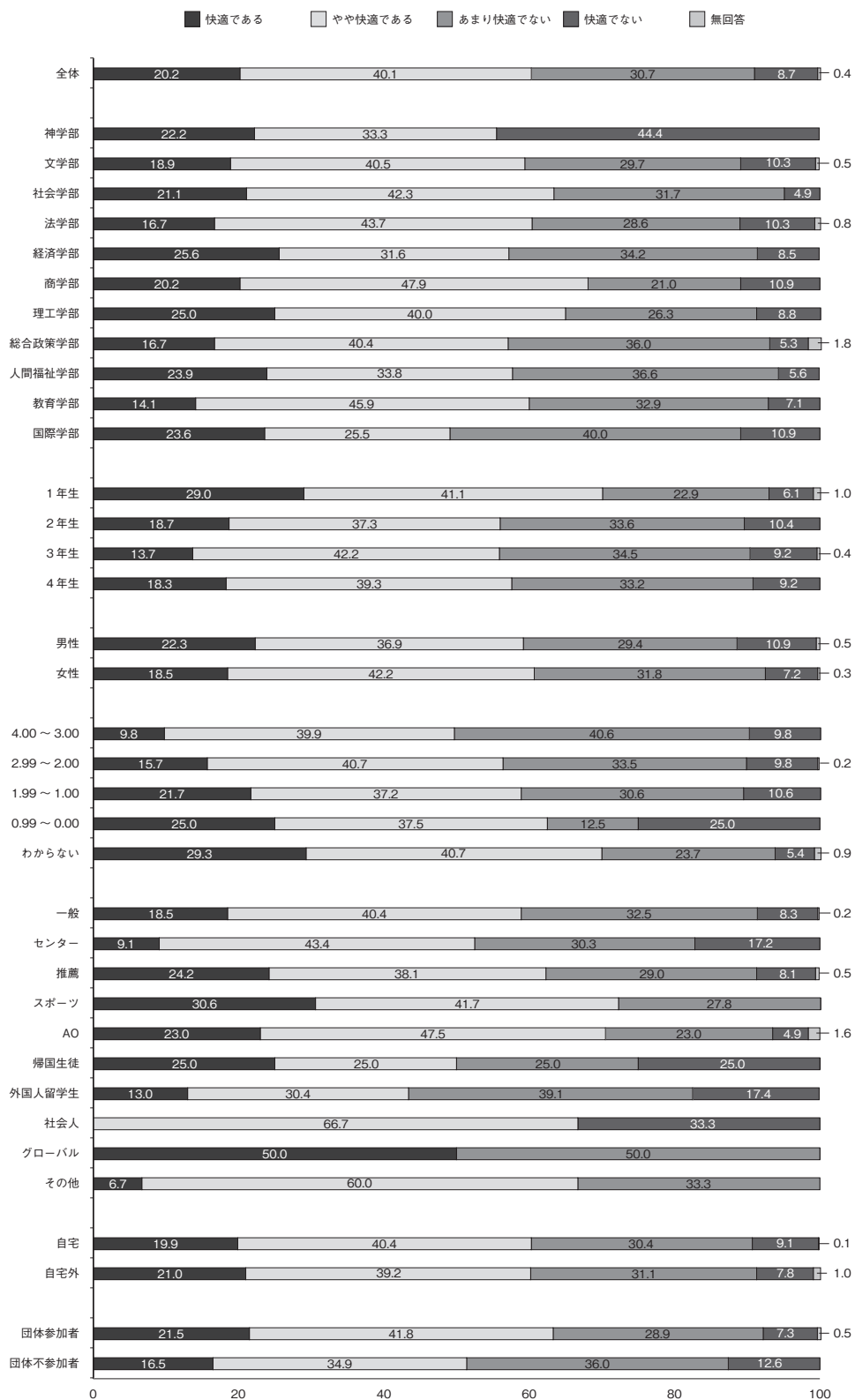
社会学部が前回の60.2%から91.8%に上昇した要因としては、新しい社会学部棟と隣接するH号館が竣工したことによる変化とみることができる。

図Ⅱ-27-3のとおり、西宮上ヶ原、神戸三田、西宮聖和のキャンパスごとにみると、「快適である」「やや快適である」の肯定的割合が、それぞれ74.9%、88.1%、60.0%となっており、キャンパス間におけるトイレの快適さの評価には差があるという結果となった。

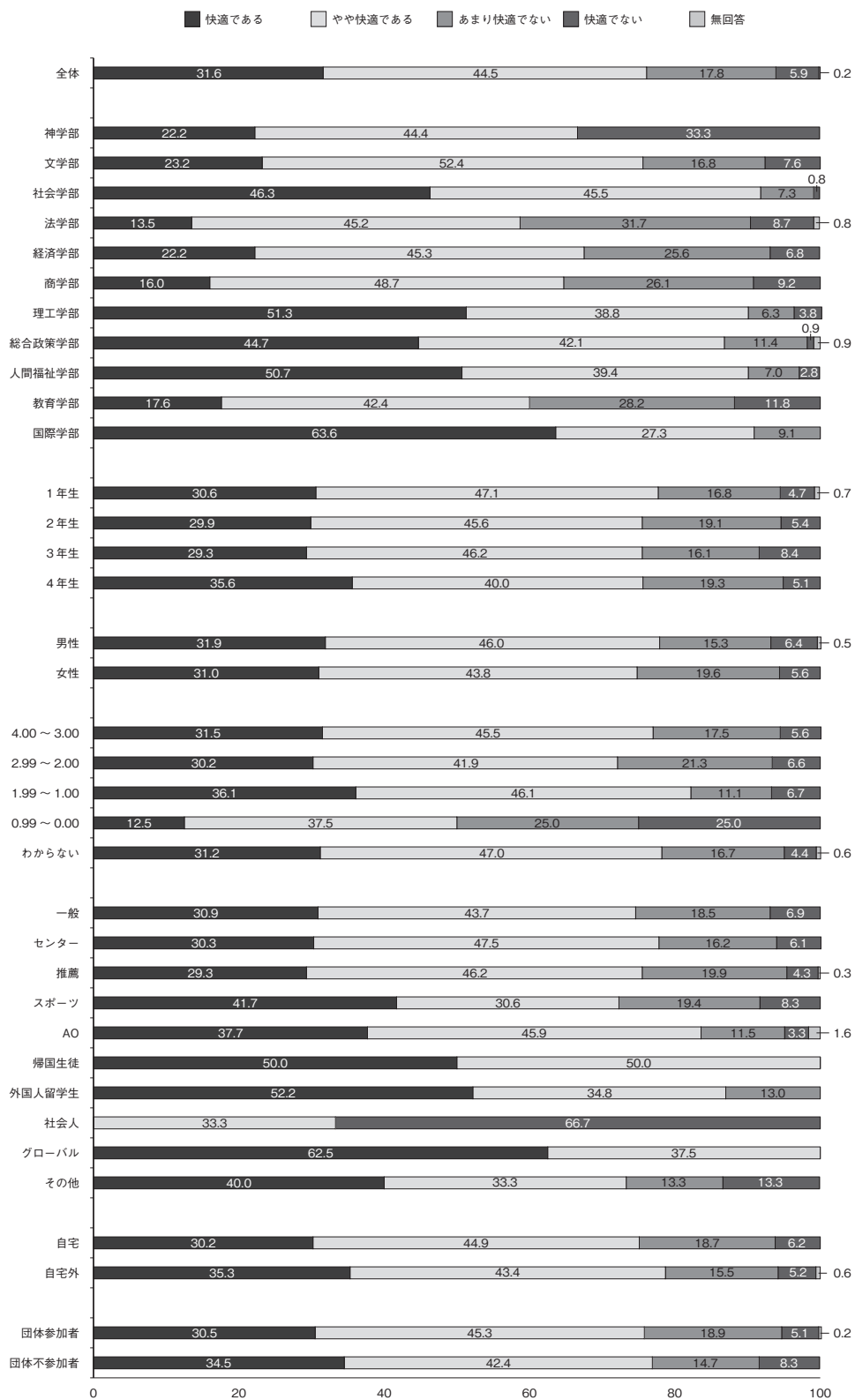
図Ⅱ-27-3 トイレの快適度（キャンパスごと）



図Ⅱ-27-4 学内のアメニティ（生活環境の快適さ） C 食堂



図Ⅱ-27-5 学内のアメニティ（生活環境の快適さ） D トイレ



## 28. 授業時間以外に過ごす場所

### Summary

もっとも回答が多かったのは、図書館（40.4%）であった。なお、キャンパスごとで過ごす場所は異なっており、各キャンパスの特徴が出た結果となった。アカデミックコモンズは、開設2年目の神戸三田キャンパスでの割合が高く、学生に浸透している結果となっている。

Q24. 授業の合間など授業時間以外をどこで過ごしますか。

最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |                                 |          |          |
|---------------------------------|----------|----------|
| 1 空き教室                          | 2 パソコン教室 | 3 図書館    |
| 4 ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田） | 5 ラウンジ   |          |
| 6 クラブやサークルの部室                   | 7 食堂     | 8 その他( ) |

授業時間外の居場所について調査するため、空き教室、パソコン教室、図書館、ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）、ラウンジ、クラブやサークルの部室、食堂、その他の選択肢で、最もあてはまるものを1つ選んでもらった。調査結果は以下の通りであった。

全体として、一番割合が高かったのが図書館（40.4%）、次いでクラブやサークルの部室（13.3%）、空き教室（10.8%）、パソコン教室（9.1%）、ラウンジ（8.2%）、ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）（6.2%）、食堂（5.5%）、その他（5.1%）の順となっている。

学部別でみると、図書館の割合が一番高かったのが文学部（51.4%）で、次いで法学部（47.6%）、教育学部（47.1%）、商学部（45.4%）、神学部（44.4%、但しサンプル数は9）、経済学部（44.4%）、社会学部（41.5%）、国際学部（30.9%）、総合政策学部（30.7%）、理工学部（20.0%）、人間福祉学部（19.7%）となっている。また、ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）の割合が一番高かったのが理工学部（28.8%）で、次いで総合政策学部（16.7%）、社会学部（9.8%）、法学部（3.2%）、商学部（2.5%）、国際学部（1.8%）、文学部（1.1%）、神学部・人間福祉学部・教育学部（西宮聖和キャンパスにはラーニングコモンズが調査段階では設置されていない）では0.0%となっている。神戸三田キャンパスでのアカデミックコモンズ利用の定着ぶりが伺える。

GPA別では、GPA1.00以上でGPA値と図書館で過ごす割合は比例（1.99～1.00で32.8%、2.99～2.00で36.3%、4.00～3.00で49.0%）している。

また、入試区分別（回答者の少ない帰国生徒入試、外国人留学生入試、社会人入試、グローバル入試を除く）でみると、図書館にいる割合は、一般入学試験で44.9%、センター利用入学試験で41.4%、推薦入学試験で37.6%、スポーツ推薦入試で22.2%、AO入試で29.5%となっている。ラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）に居る割合は、一般入学試験で6.7%、センター利用入学試験で7.1%、推薦入学試験で6.3%、スポーツ推薦入試で0.0%、AO入試で4.9%となっている。スポーツ推薦入試では回答者が36人であるものの、空き時間をラーニングコモンズ（上ケ原）・アカデミックコモンズ（三田）ではなく、クラブやサークルの部室（38.9%）で過ごしていることが分かる。

キャンパスごとにみると、居場所の上位3つは西宮上ケ原キャンパスで図書館（43.1%）、クラブやサークルの部室（16.9%）、空き教室（11.1%）、神戸三田キャンパスで図書館（26.3%）、パソコン教室（22.2%）、アカデミックコモンズ（三田）（21.6%）、西宮聖和キャンパスで図書館（47.1%）、空き教室（25.9%）、パソコン教室（10.6%）となった。キャンパスごとの特徴が反映されている。

図 II-28-1 授業時間以外に過ごす場所（キャンパスごと）

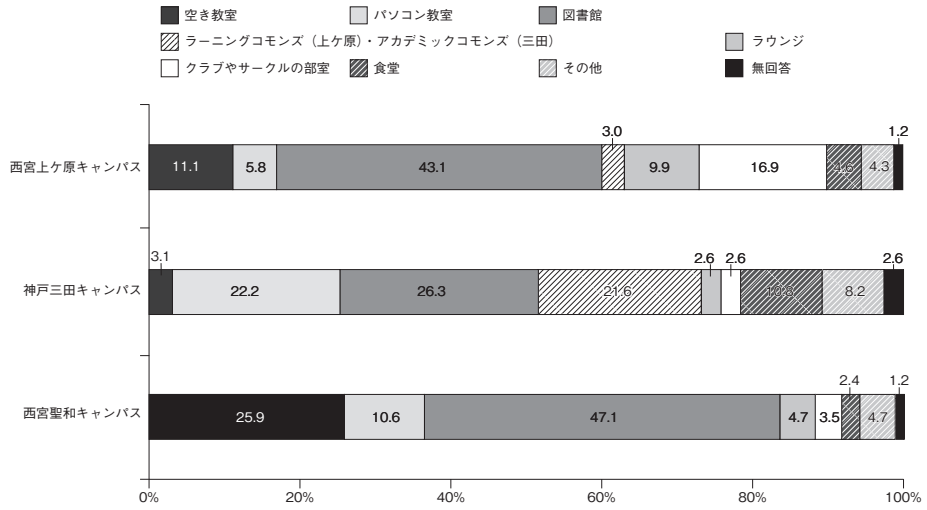
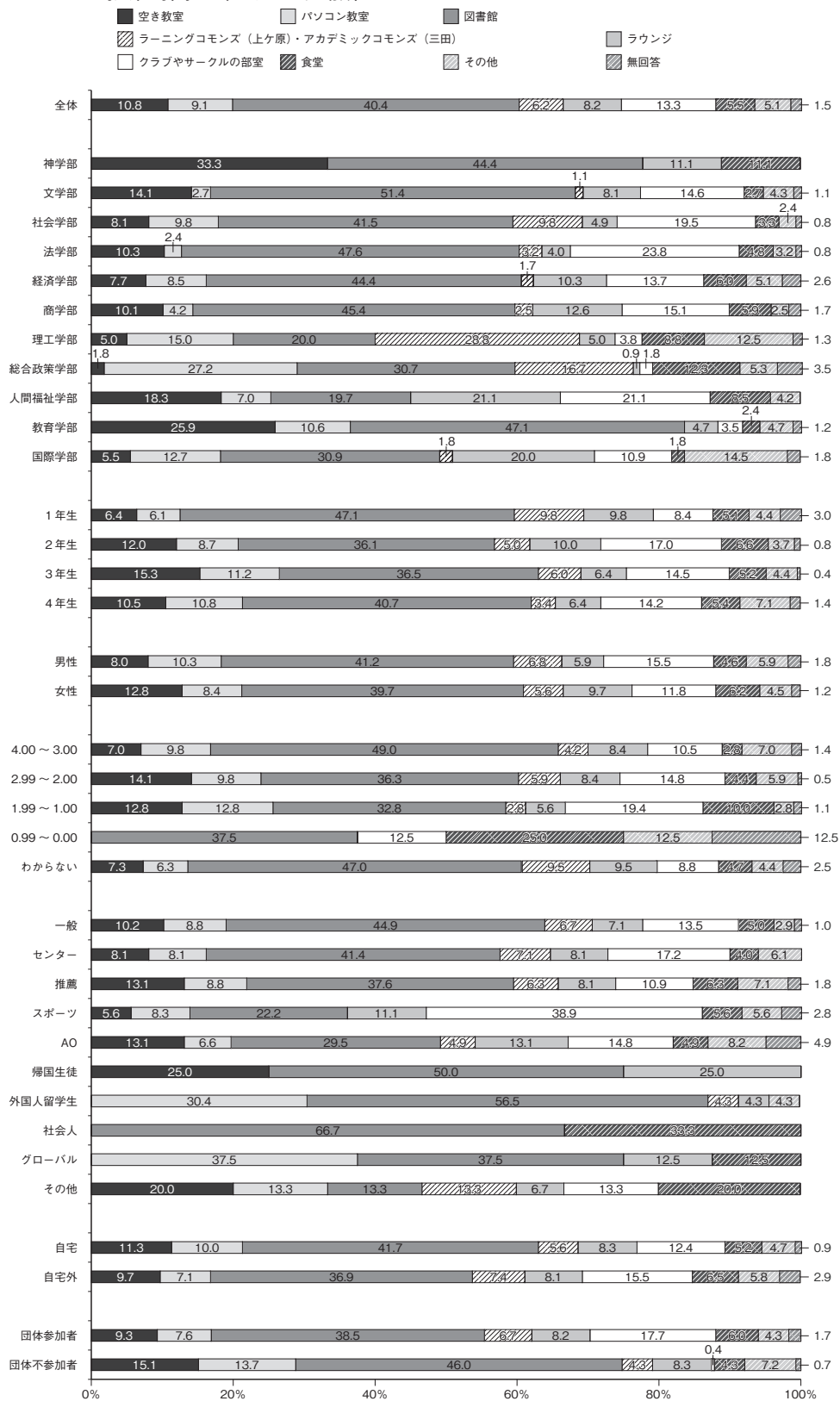


図 II-28-2 授業時間以外に過ごす場所





## 29. 学生が大学提供のWebサービスにアクセスする情報端末

### Summary

全体としては、パソコン（個人所有）が39.8%、パソコン（学内）が27.8%と、パソコンでのアクセスが全体の約7割を占める結果となった。

Q25. 大学が提供しているさまざまなWebサービスや検索システム（LUNA、シラバス、図書館のOPACなど）にアクセスするときに主に利用する情報端末は何ですか。最もあてはまるものに、1つだけ○をつけてください。

- |            |              |           |
|------------|--------------|-----------|
| 1 パソコン(学内) | 2 パソコン（個人所有） | 3 スマートフォン |
| 4 タブレット端末  | 5 その他（       | ）         |

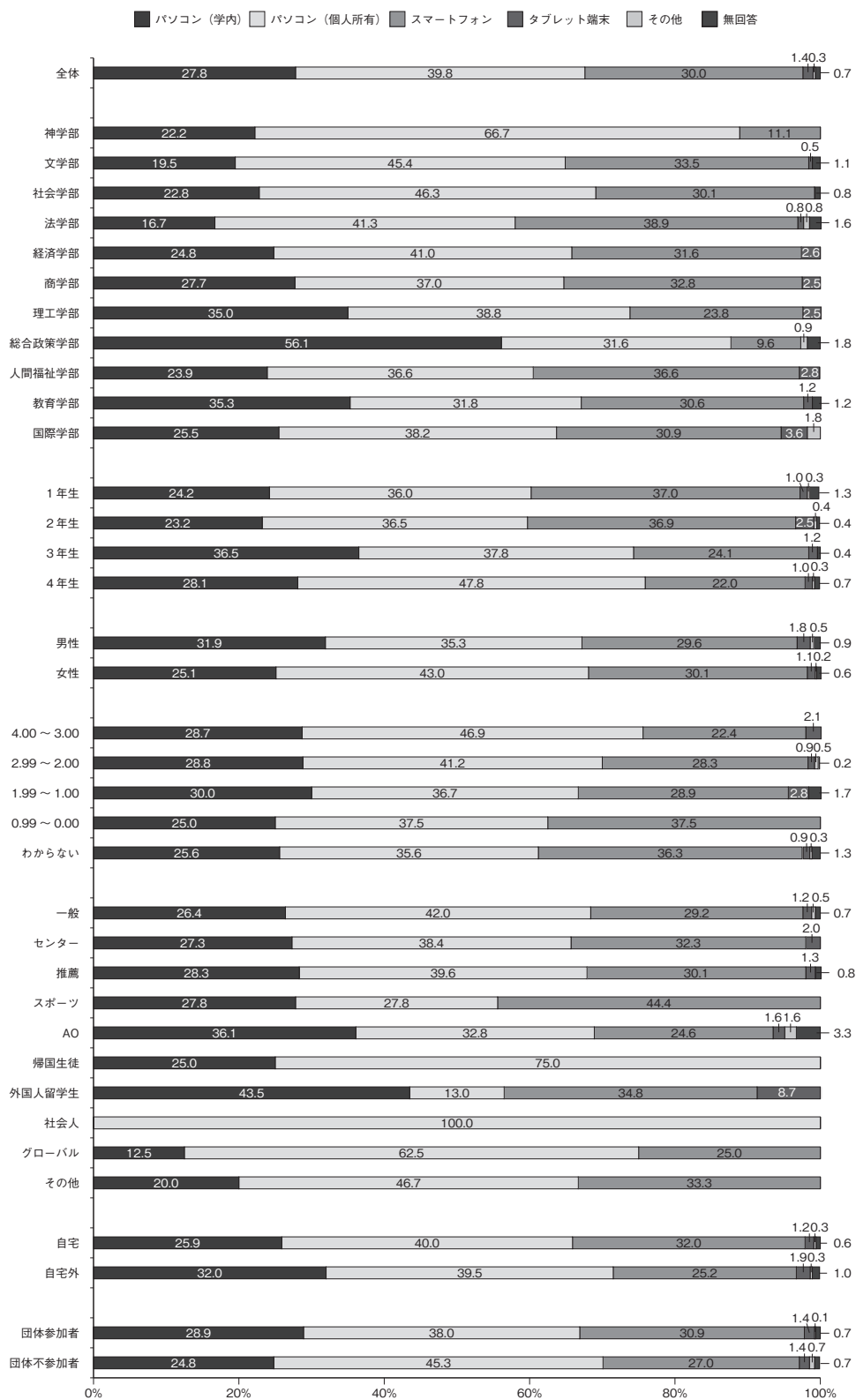
大学から提供されているウェブ上でのサービスについて、その利用端末を聞いた。全体としては、パソコン（個人所有）が39.8%、パソコン（学内）が27.8%、スマートフォンが30.0%、タブレット端末が1.4%、その他が0.3%となり、パソコンでのアクセスが全体の約7割を占める結果となった。

学部別でみると、パソコンでアクセスしている割合が高いベスト3が総合政策学部（87.7%）、次いで理工学部（73.8%）、社会学部（69.1%）である。学年別でみると、パソコンでのアクセス割合は3年生、4年生で増加し、その分スマートフォンでのアクセス割合は減少している。この現象は、就職活動が影響しているものと推察される。

居住形態別（自宅／自宅外）では、「自宅」で学内のパソコンからアクセスする割合が25.9%であるのに対し、「自宅外」では32.0%となっている。団体参加／不参加別では、「参加」で個人所有のパソコンからアクセスする割合が38.0%であるのに対し、「不参加」では45.3%となっている。

キャンパスごとにみると、西宮上ヶ原キャンパスではパソコンでアクセス（64.3%）、スマートフォンでアクセス（33.3%）であるのに対し、神戸三田キャンパスではパソコンでアクセス（82.0%）、スマートフォンでアクセス（15.5%）、西宮聖和キャンパスではパソコンでアクセス（67.1%）、スマートフォンでアクセス（30.6%）であった。

図Ⅱ-29 学生が大学提供のWebサービスにアクセスする情報端末



## 30. インターンシップについて

### Summary

インターンシップの参加期間は、男性の73.2%、女性の84.7%は1日～10日までである。また、3年生までは学年進行に応じて、参加意欲が高まっている結果となった。ただし、参加しない理由を聞くと、低学年を中心にインターンシップの意義や主旨が理解されていない回答が多いため、意義を知ってもらえる機会を増やすなどの施策が今まで以上に必要である。

Q26-1. あなたは大学入学後にインターンシップに参加したことがありますか。

- 1 ある 2 ない

Q26-2. Q26-1で「1 ある」と答えた方にお尋ねします。

インターンシップに参加した日数（実際に企業等に出向いた日数）を教えてください。複数回参加したことがある場合は、最も長い期間に○をつけてください。

- |          |          |         |
|----------|----------|---------|
| 1 1日     | 2 2～5日   | 3 6～10日 |
| 4 11～15日 | 5 16～20日 | 6 21日以上 |

Q26-3. Q26-1で「2 ない」と答えた方にお尋ねします。

インターンシップに参加したいと思いますか。

- 1 参加したい 2 参加したいと思わない  
3 参加希望だったが参加できなかった

Q26-4. Q26-3で「2 参加したいと思わない」、「3 参加希望だったが参加できなかった」と答えた方にお尋ねします。その理由をお書きください。

インターンシップへの参加経験は、「ある」が10.5%で「ない」が89.4%であり、大半の学生はインターンシップ未経験である。学年別では、参加経験の「ある」学年は、4年生32.5%と最も多い。しかしながら、この調査は6月実施のものであることから、実質は3年生までに参加経験をしている学生が、もっとも多いと考えられる。次に、男女別では、参加経験の「ある」女性の学生は11.2%と、男性の9.3%を上回る結果となった。GPA別では、参加経験の「ある」学生は、GPA上位層から18.9%、15.5%、9.4%、0.0%とGPAが上位者ほど、インターンシップ経験が多くなる。学業成績とインターンシップ参加意欲の相関関係がみてとれる。最後に、団体参加別では、団体参加者のインターンシップへの参加経験は8.9%に対して、団体不参加者の参加率は15.1%と倍近い数字となっている。Q26-3の団体参加者の理由からは、「部活動に集中したい」「サークルの予定と重なった」などの記載があり、団体不参加者の方がインターンシップに参加している状況にある。

Q26-2では、Q26-1で「ある」と答えた方へ参加日数を聞いている。全体で最も多いのが「2～5日」(33.3%)となっており、「6～10日」および「1日」(ともに23.7%)のインターンシップ参加が続く。

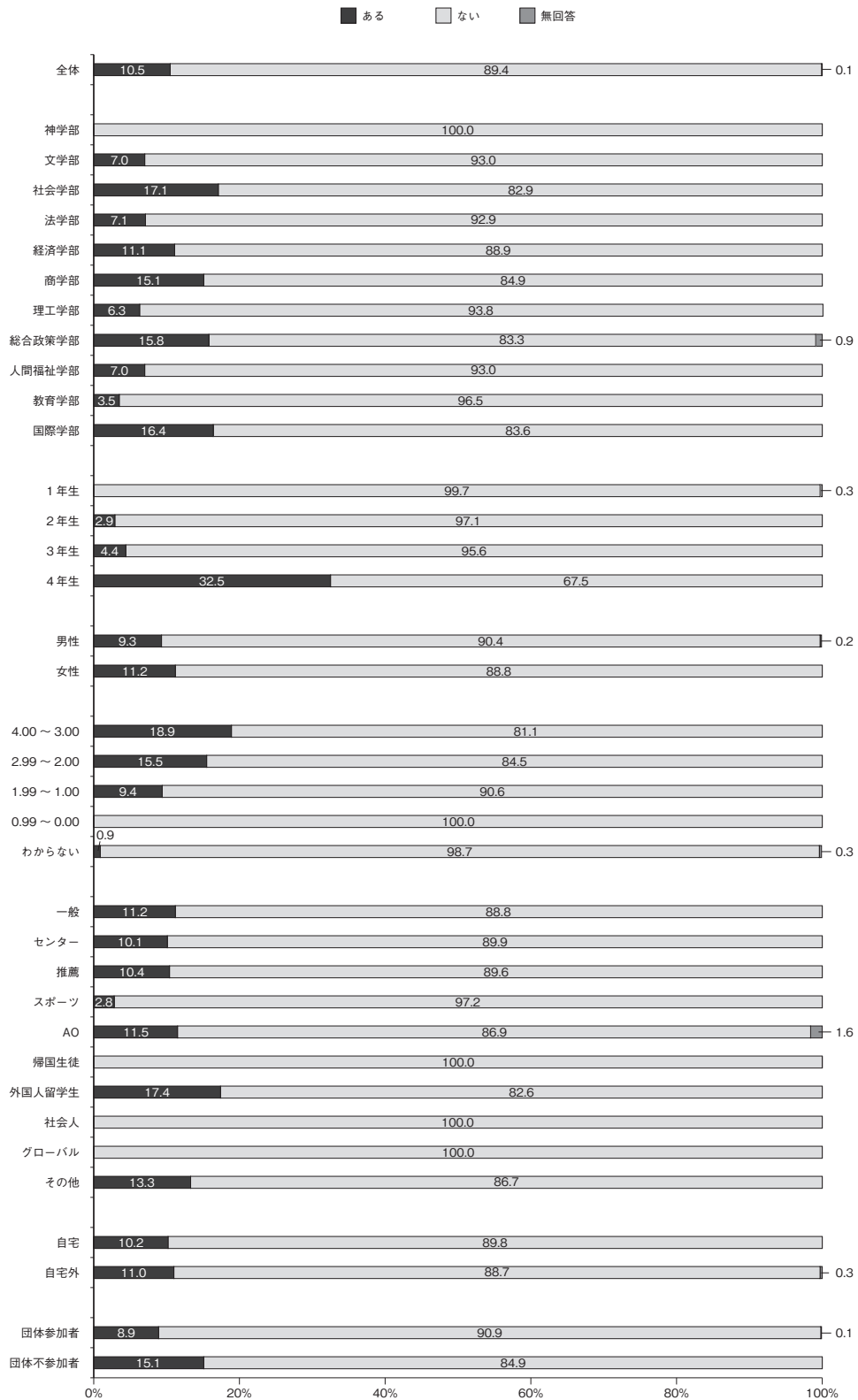
男女別では、1日～10日までの参加期間で男性が73.2%、女性84.7%を占めている。男性は「21日以上 (14.6%)」、「11～15日 (7.3%)」がいずれも女性を上回る結果となり、比較的長期のインターンシップに参加している。

Q26-3は、Q26-1で「ない」と答えた方へのインターンシップ参加意欲について聞いている。「参

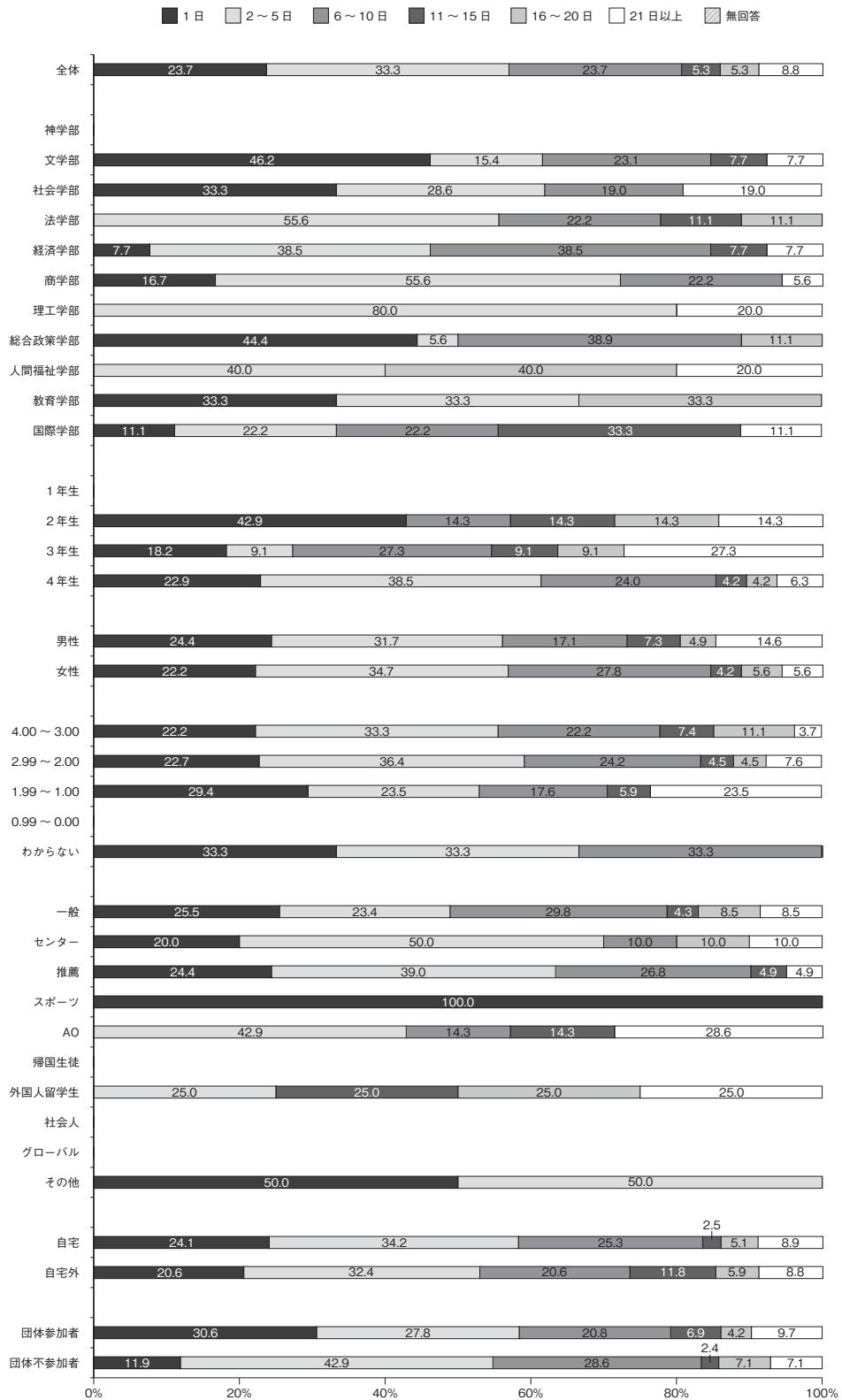
加したい」が1年生の69.3%、2年生の74.8%、3年生の76.9%と学年があがるにつれ、参加意欲があがっている結果となった。ただし、4年生は25.6%と大きく下がっている。これは本調査が6月実施であり、就職活動中もしくは進路決定等の関係と考えられる。団体参加別では、団体参加者の66.0%が「参加したい」と考えており、団体不参加者の55.1%より1割上回っている。

Q26-4では、Q26-3で「2 参加したいと思わない」「3 参加希望だったが参加できなかった」と回答した方へその理由を自由記述で聞いた。Q26-1の団体参加者の結果に関連するが、「部活動で参加できなかった」等の理由をはじめとして、「公務員の勉強のため」、「ボランティアや実習を優先させたい」等、インターンシップ以外の活動に注力するものや、「(インターンシップの) 選考で落ちた」等インターンシップには前向きだったものの選考されなかったという理由が半数以上を占めた一方で、低学年が中心ではあるが、「興味がない」が記述者の約15%強を占めた。この他にも「就職活動はまだ早い」、「企業就職を希望していないから」、「何のことからわからない」、「知らない」、「メリットがわからない」とインターンシップの意義や主旨が理解されていないことがこの調査であきらかになった。今後は、低学年からインターンシップの意義を知ってもらえる機会を増やすなどの施策を今まで以上に考えていく必要がある。

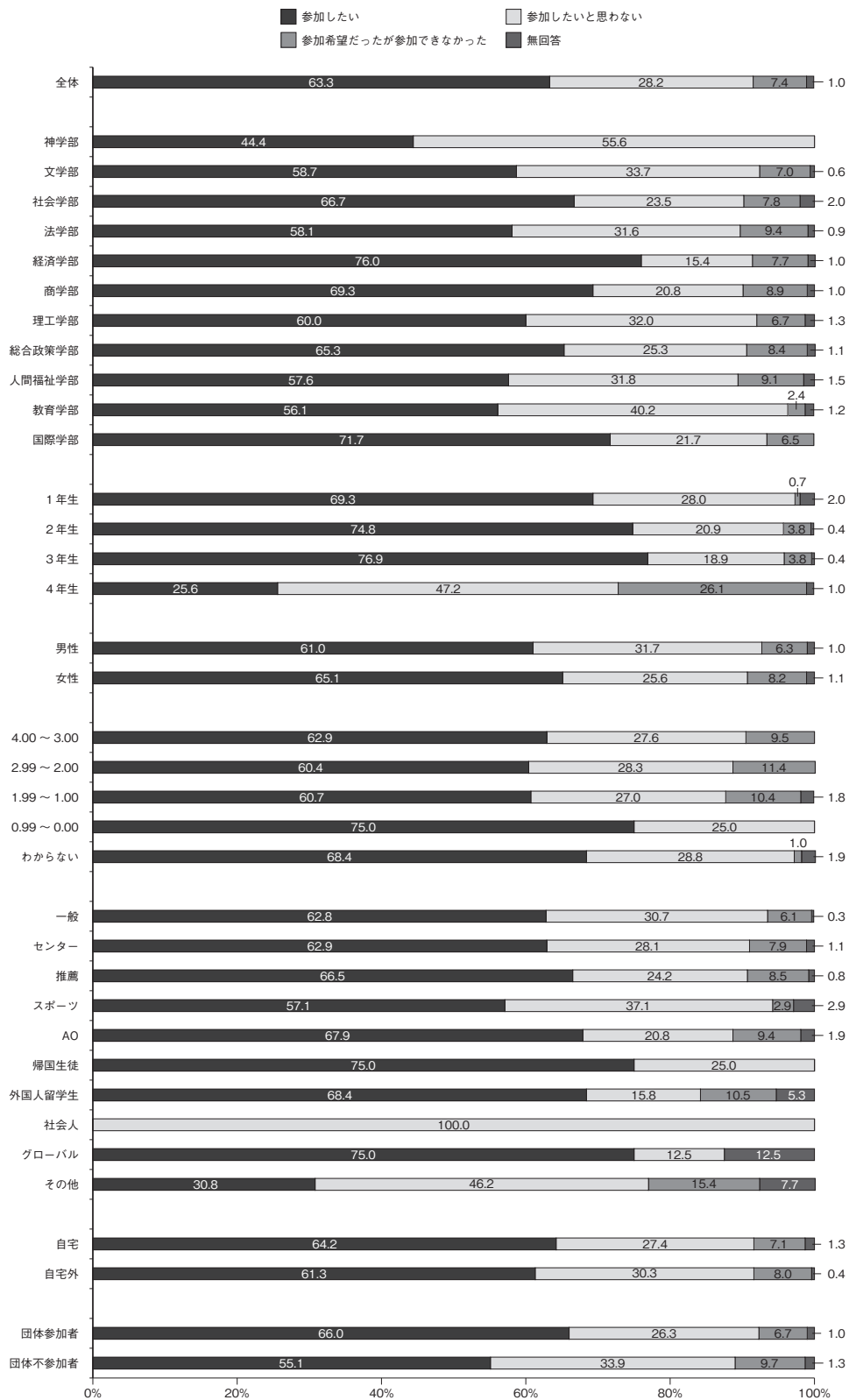
図Ⅱ-30-1 インターンシップの参加率



図Ⅱ-30-2 インターンシップに参加した日数



図Ⅱ-30-3 インターンシップへの参加意思





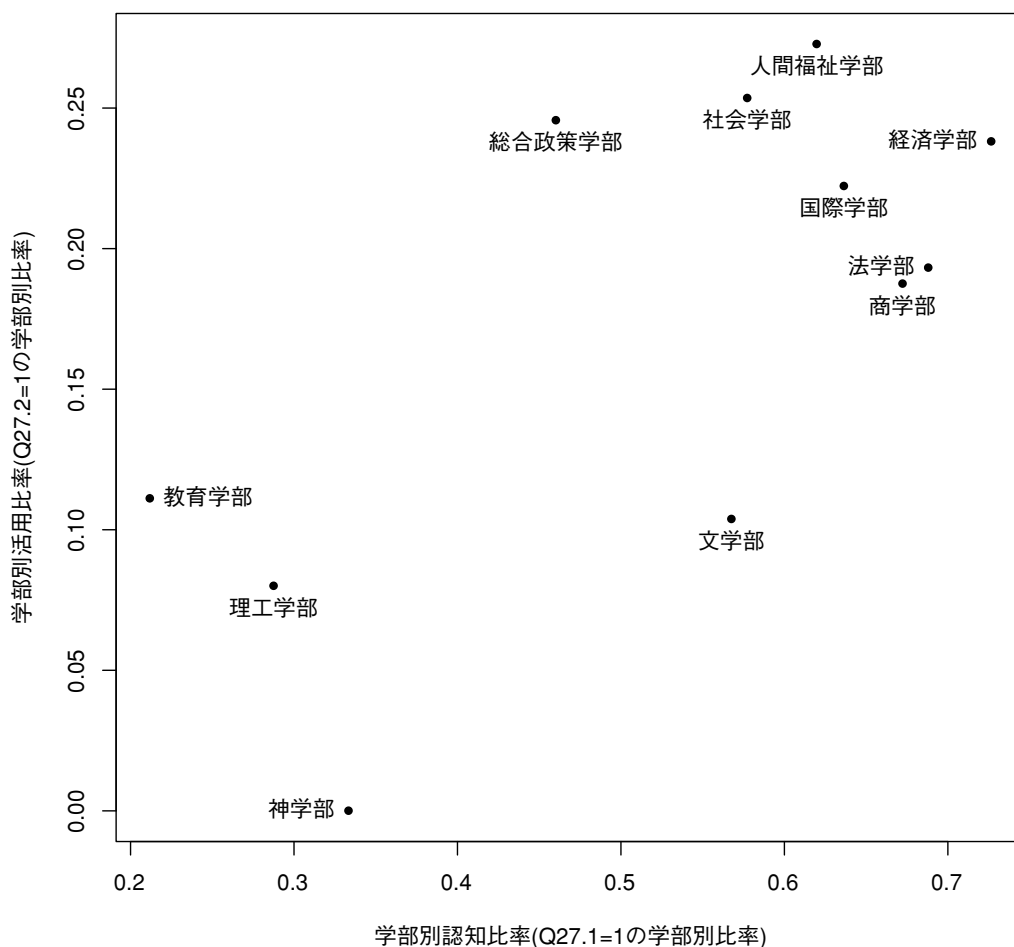


結果となった。

興味深いのは、学部別の分布において、認知度の高かった上位3学部（法学部、経済学部、商学部）より相対的に認知度が低かった3学部（社会学部、総合政策学部、人間福祉学部）が「活用している（したことがある）」と回答した割合が多くなっていることである。社会学部、総合政策学部、人間福祉学部の学生は活用したいと思う気持ちをもったうえで本プログラムに関する情報を得た学生の割合が他学部に比べて相対的に高かったのかもしれない。認知度と活用度で学部別の分布の上位が入れ替わっており、一見すると認知度と活用度の間に学部別分布での相関関係は低いように思われる。しかしながら、学部別認知比率（「知っている」）と学部ごと活用比率（「活用している（したことがある）」）との関係を調査すると、当然のことながら「知っている」学生が多くいれば、「活用している」学生も多くなっている。

「活用したいができない理由」として、最も多かった理由は「時間がない」で56.5%、次いで「受講料を払えない」が18.8%と続いている。「時間がない」という理由が半数以上を占めているが、将来に向けて何が必要なのかを十分に考えられていない可能性がある。その点の意識づけを含めた告知が必要と考える。

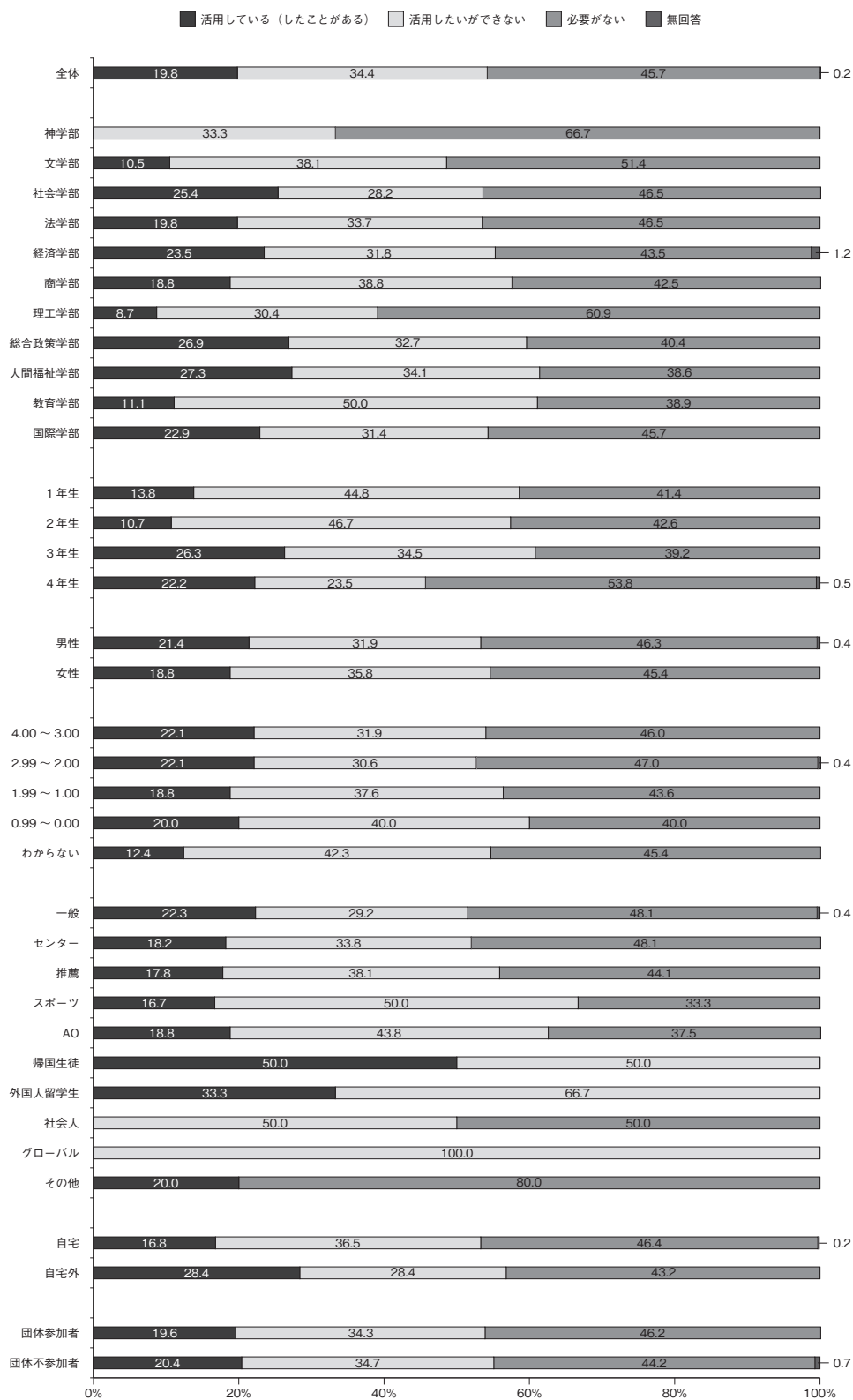
図Ⅱ-31-1 学部別認知比率と活用比率の関係（R=0.65）



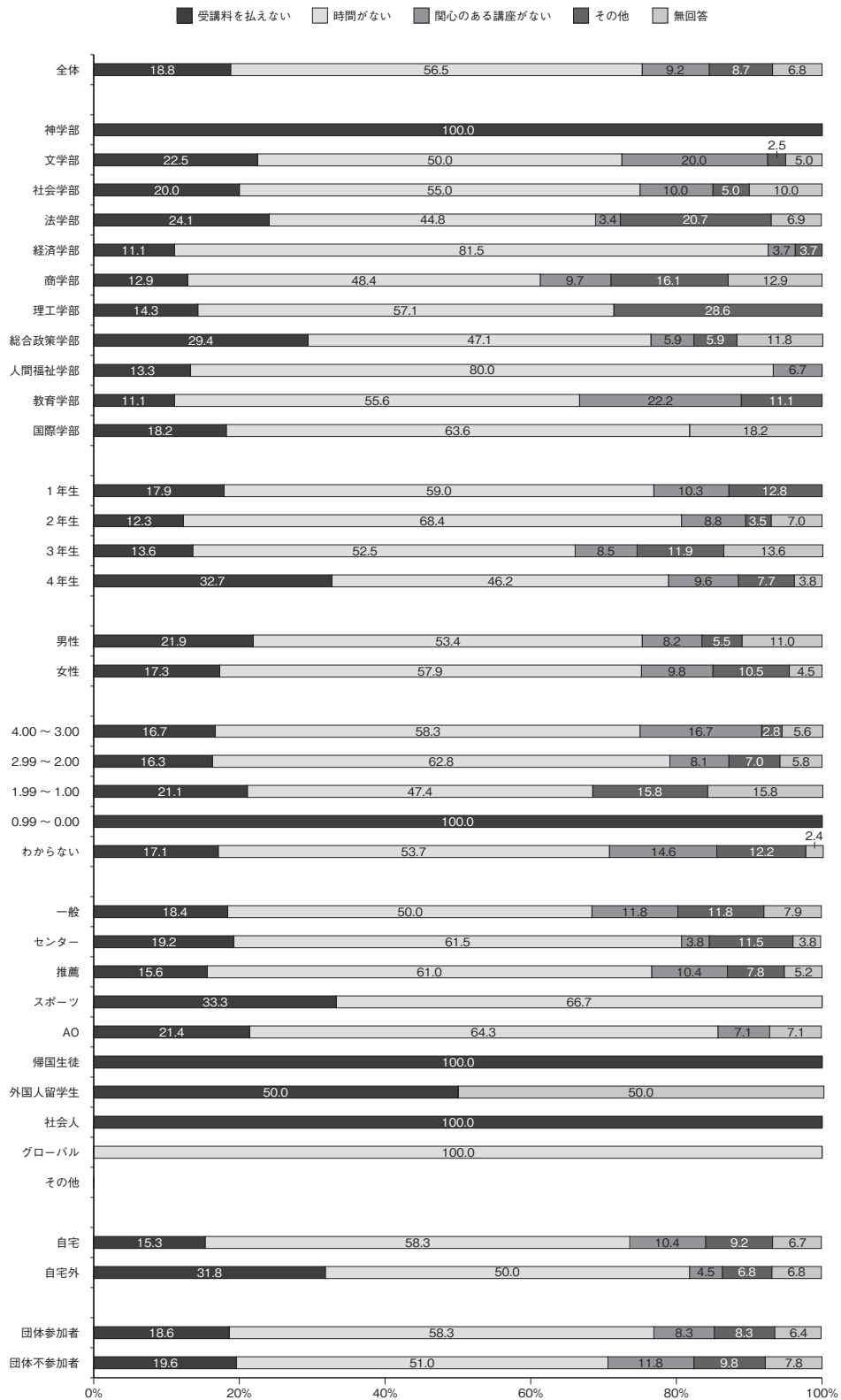
図Ⅱ-31-2 エクステンションプログラムの認知度



図Ⅱ-31-3 エクステンションプログラムの活用度



図Ⅱ-31-4 エクステンションプログラムを活用できない理由



## 32. 卒業後の生涯学習プログラムの活用希望について

### Summary

全体では半数以上の学生が活用を希望しない結果となったが、4年生は55.3%の学生が活用を希望しており、卒業近くになると、卒業後に大学で学ぶ機会があれば学びたいと考える学生が多くなっている。

Q28. 卒業(修了)後も学びたい講座、プログラムがあれば、有料でも大学で学びたいと思いますか。

1 思う

2 思わない

卒業後の生涯学習プログラムの活用希望についてもこれまで調査したことがなかったが、「卒業(修了)後も学びたい講座、プログラムがあれば、有料でも大学で学びたいと思いますか。」という問いに対し、「思う・思わない」の二者択一で質問を設定した。

「思う」の割合は44.9%となり、「思わない」の54.2%を約10%下回る結果となった。学年別では4年生のみ、「思う」が55.3%と「思わない」の44.7%を上回り、その他の学年ではいずれも「思う」が「思わない」を下回った(図Ⅱ-32)。4年生の回答で「思う」の比率が高かったのは、卒業が身近なものとして感じられる学年になり、卒業後も大学で学ぶ機会があれば学びたいと考える学生が多くなっていると推測できる。卒業後に生涯学習プログラムの利用を希望する学生が一定数存在していることは、大変意義深い。

生涯学習の機会を提供することは大学としての一つの大きな役割、機能であり、本学として今後も卒業生に活用してもらえるようなプログラムをより充実させていかななくてはならない。

図Ⅱ-32 卒業後の生涯学習プログラムの活用希望

